

---

# 夜天の主と黒い騎士

ファイター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜天の主と黒い騎士

### 【Nコード】

N7826U

### 【作者名】

ファイター

### 【あらすじ】

意識を失った主人公が、次に意識を取り戻すと、そこは自分が存在した世界じゃなかった。このお話は神様は出てきません。

主人公はそれなりに強いですが、最強ではありません。傷つきます。それでも、なんとか能力を駆使して勝利します。

では……

**注意書き？ (前書き)**

魔法少女リリカルなのはの世界に一人のイレギュラーが介入する！

## 注意書き？

魔法少女リリカルなのはの世界に一人のイレギュラーが介入する！

|| ||

こんにちは、作者のファイターです。自分では既に三回はリリなの  
の二次作品を書かしていただいてますが、今回が初投稿になります。  
まず、言っておかなければならないことがあります。

一つ目が、私は男です。つまり、原作キャラに対して主人公が余り  
にも信用され過ぎている等の都合のいい方へ持つて行っています。  
これについては、違和感を無くす為に努力していきたいと思ってい  
ます。

二つ目、魔法についての独自解釈やオリジナル魔法が含まれていま  
す。なるべくオリジナル魔法の方は（原作キャラに限り）出さない  
様にしますが、やはり少なからず登場します。

三つ、私は学生です。高校三年生です。受験です。現実逃避したく  
なります。更新が遅れる可能性があります。

|| ||

これらの点が嫌な方は、戻るを押してくださって結構です。もし、  
そのまま読んじゃえ。と言う方は、ぜひとも読んでください

## 第0話〜プロローグ〜（前書き）

短い投稿になるかもしれませんが。

誤字脱字などがあれば、報告してください。

## 第0話〜プロローグ〜

俺が自分の状況を把握できたのは五歳からだった。

意識の暗転を繰り返し、気が付けば魔法というものを手にしていた

|| || || ||

頭の中でイメージ

すると、今見ていた景色は一転して別の場所に移動する。それは、  
頭の中で描いていた場所だ

|| || || ||

世間一般には何の変哲もない朝は、俺とて何ら変わりのないものだ。

「おはよう」

「みゃ〜」

とあるマンションの一角に俺の部屋はある。親が買い取った部屋を

今まで使っているのだ。家族は猫が一匹とメダカが三十匹ほど。大丈夫だ、ちゃんと共存している

時刻は十時を過ぎた頃だろうか、キッチンには最新式のIH。水の入ったヤカンをIHの上に置き、カップを取り出す。何時もの場所に置いてあるコーヒーを取り、シオンの朝ごはんを用意する。キャットフードは三年前に跳ね除けてしまっ、今は俺がシオンの為に作ったご飯を上げているのだ。メダカには無難な餌を与えている。

「ほら、ご飯」

「み〜」

嬉しそうに皿に入ったご飯を食べ始めたシオンを見ると、キッチンからお湯が沸いた独特な音に呼び戻される。コーヒーを淹れる。最初は少しだけ淹れて蒸らし、後は普通に淹れる。そうすれば美味しいコーヒーの出来上がりだ

「…………あれ、今日って学校だったか？」

たった今、淹れたコーヒーをある喫茶店と比べながら飲み、携帯を開く。電話が一件メールが三件。電話は煩い教師のもので、当たり前のように無視。メールは…………あの喫茶店の奥さんから二件、八神は

やてから一件。

ディスプレイに表示されている時刻は、普通の学生なら焦って準備して家を飛び出すのだが慌てることはない。なんたって、二回目なのだから……たった今、淹れたコーヒーをある喫茶店と比べながら飲み、携帯を開く。電話が一件

メールが三件。電話は煩い教師のもので、当たり前のように無視。メールは……あの喫茶店の奥さんから二件、八神はやてから一件。ディスプレイに表示されている時刻は、普通の学生なら焦って準備して家を飛び出すのだが慌てることはない。なんたって、二回目なのだから……

奥さんからのメールは……7時と8時に送られてきていて、内容は「来年から受験生なのだから、ちゃんと時間通りに起きて学校に行きなさい。」といったものだった。

また、「ちゃんと起きないようなら娘を送るわよ」とか軽く脅しが入っていると最後に書かれていた。あの家なら本当にやりかねないのだから、少し恐怖の的だったりする

「今から学校はダルい」

「みゃ〜」

足にすり寄ってきたシオンを抱き上げ膝の上に置く。シオンの定位置と言ってもいい。



「はやての方は……」

こちらも何ら変哲もない「今日、買い物に行くので付き合ってくれへん？」というものだ。彼女は9歳だが、親を交通事故で亡くし自身もその時の怪我で足に決して軽くない傷を負ってしまった。今は車いすで生活し、一人にしては広い家で過ごしている。

似たような環境なのか、五つも年下の彼女とは仲が良い。一緒に買い物に行ったり、家に遊びに行ったり遊びに来てもらったり、お泊り会と称して一緒に寝た時もあった。

普通ならこんなことはしないのだが、これでも精神的には三十歳を乗り越えている。可愛い妹のようなものだ

二つ返事でメールを返し、奥さんの方は……無視しよう。

数分も経たないうちに明るいうちに着信音と共にメールが返ってきた。「ほなら、12時からデパート行こ！」と何とも絵文字をふんだんに使った今らしい女の子だ。

迎えに行くとメールを打ち、ソファアの上に携帯を軽く投げ飛ばしシオンを膝から降ろす。勿論、することは服を選ぶことだ。

黒のジーンズに黒のTシャツ。その上に黒の薄手の上着を羽織、左耳にシルバーのイアリングを着けて準備は完了だ。財布の中身も確認。買い物をして昼食を食べるには十分な額の入っている。

自分の部屋からリビングに移動し、机の上に置いてある深い青色の箱から一本の煙草を取りだし火をつけた。紫煙の煙がゆらゆらとまよい、消える。

流石に9歳の子供の前では吸えないし、外で吸っては年齢的に補導されてしまうのだ。

フィルターぎりぎりまで吸い、時計を見ると11時過ぎ。

少し早く家を出てしまおう。

そう考えた俺は、携帯をポケットに突っ込んだ。そして、シオンを一撫でして机の上に大事に置いてある十字架のネックレスを手に持った。ちょうど、クロスしてある場所に蒼い宝石をあしらったもので、これも三年前に家に転がり込んできたものだ。普通のネックレスでは無く、非現実的なもの。ピカピカと点滅を繰り返す宝石……インジェリエンスデバイスを首に掛けると、女性の声が胸元から発せられた

「おはようございますご主人様。今日はどうしました？」

「おはようアカレラ。今日ははやてと買い物。」

「左様ですか。なら、私は記録を行います。よろしいですか？」

「ああ、頼む。何時もみたいに、はやてを驚かしてやるっ」

そう言って、俺とアカレラは家を出た

## 第0話〜プロローグ〜（後書き）

ヤバイ。

NOSの操作方法が分からなくなってきた。

正確には投稿方法が全く分からない。

## 第1話(前書き)

少々、やってしまった感があります

## 第1話

12時になる前に八神家に到着してしまい、インターホンを押した

『あ、悠也。もう来たんか？ちょっと上がって待って』

インターホン越しに聞こえてくる声に苦笑いしながら、ポケットから鍵を取りだし玄関の鍵を開けた。何時だったか、はやては俺に鍵を渡してきたのだ。無防備に、無邪気に、世間の怖さを知らない彼女だが、寂しさは人一倍に感じていたのだろうか？

その時は何とも言えない感じで受け取ってしまった。今に至るのだが……  
靴を脱ぎ、リビングに入るとはやては車いすをせっせと押しながら家事をこなしていた。

「はやて、後は俺がやっておくから着替えておいで」

「え、でも……」

「なんだ、お姫様抱っこでもしてほしいのか？」

「あう」

はやてが着ているのは見覚えのあるパジャマ姿。まだ準備もできていなかったのだろう。

約束の時間まで30分以上あるとは言え、早くに着いてしまったのだ。これくらいはやらねば、人間としても男としても最低だ。

はやては大人しく二階に上がり着替えに行った。

「さて、まずは洗濯物か」

- - - - -

12時には家事という家事は全て終え、下りてきたはやての車いすを押してデパートに向かっていた。

後ろから車いすを押している状態なので表情は窺えないが、鼻歌を歌っているから頬を綻ばしているのだろう。茶色い髪の毛に、バツテンの髪飾り。薄いピンクの長そでに淡いジーンズが今日の彼女の服装だ。

「  
」

デパートまではだいたい30分ほど。その間、はやてはずっと鼻歌を歌ったままだった

- - - - -

デパートに入ると、まず三階に向かった。このデパートは6階建てで、1階が食品売り場。

二階三階が日用品や衣類を売っているエリアで、五階はレストラン街と言って、レストランやバイキングなどがあるエリア。六階は娯楽施設が数多くあるエリアだ。

「はやて、今日はなにを買った？」

「ん、今日は服とか欲しいからウィーン行こ」

最近、このデパートに出来た衣類を扱う店で、名前は「ウィーン」雑誌にも取り上げられていて主に客層は女の子が中心だ。

「んじゃ、行ってみるか」

「うん」

ぱあっ、はやての笑顔が咲き誇る。その笑顔は見ている人も笑顔になつてくる笑顔で、思わず口元が緩む

「あ、なんで笑うん？」

「いや、嬉しそうだなって」

「そりゃそうや！久しぶりに悠也と一緒にデパート行けてるんやも  
ん」

つつついクシャ、と頭をなでてしまい怒られてしまった。せつかく寝癖直したのにまた変になるゝとか。じゃれている内に「ウィーン」に到着。

店内は明るく、服を飾っているスペースも広く車いすでも余裕があるくらいだ。

男の俺には少々酷なものもあるのだが、今のはやてを見ている内にそんなのは関係なくなっている。それに、今は学生などは一切ないので恥ずかしい思いもせずにする。

「あ、悠也も何か買いたいもんある？」

「俺か？そうだな……」

冷蔵庫の中は食材はまだある。日用品もある……。結果、何もなし。強いて言えば煙草くらいかな？

「特にないかな？」



「それじゃ、私のファッションショー見てくれへん？」

「いいよ、今店員さん呼んでくるから」

既にはやての膝の上には何着かの服があり、俺の手の中にも服がある。車いすでは試着室には入れない。入ったとしても一人で試着することは難しいのだ。

「ほな、待つててな」

店員と一緒に試着室に入っていくはやて。呼んできた店員には何故か暖かい目で見られたが、気にしていない。とは言え、少しだけ時間ができてしまった。ポケットで震えている携帯を取りだし、耳に当てた

『あら、今は学校の筈よね？』

何も言わずに通話を切った。が数秒も経たないうちにまた携帯が振動した

『何ですか？』

『何で切ったのかしらね？』

『いや、それはあれですよ。反抗期？』

『自分で言わないの！まったく、今の時間帯で電話に出てるってことはまた学校に行つて無いのね？』

『仕方ないじゃないですか。面白くないし』

二回目だし……

『なのはの家庭教師、しない？』

試着室のカーテンが開いた。電話はもちろん既に切つてやった。試着室から店員と一緒に出てきたはやては、着てきた服装とはまるつきり違う服装だった。黒いスカートにヒラヒラの付いた黒いワンピースの様なものを着ていた。違う服装と言うよりも雰囲気がまるで違った

「どう、似合ひ？」

「うん、雰囲気が変わったよ。どこかの令嬢みたいだ」

「えへへ」

照れていることを隠しもしないはやてだが、顔には笑みが浮かんでおり素直に嬉しい様だ。色々な服を持って試着室に入ったので、またはやては試着室に入っていた。

暫くはやての一人ファッションショーを見ていると、ふと視界の端に銀に輝く物が入った。それは、ジッポだ。実は、悠也は気に入ったジッポを集めている。少し値の張った物も買ってしまったが、それでも悠也の自室には四つほどのシルバーのジッポが飾られている。趣味の一つと言ってもいいのだが、学生のすることでは無いことは確かだ

「あれ、何見てるん？」

「いいのなかならって」

飾られているジッポを手に取り、一つ一つ眺めていくがここに悠也の欲しい物は無いようだ。落胆の表情を見せた悠也は後ろにいるはやての方に向き直った。既に試着を終え、会計を済ませようとしているのかその小さな手には財布が握られている。勿論、はやてに払わせるつもりはさらさら無いので一人でレジの方へ向かい、財布を取り出す。

「ちよ、悠也！」

「あ、ポイントカード」

財布からポイントカードを取り出すと、はやては車いすのまま突っ込んできた。脹脛の下あたりにあたった車いすは微妙に痛い

「今回は私の買い物だから、悠也は払わなくてええの！」

「へえ〜」

「な、なんや？」

「この額、小学生が買えるのかな？」

表示された額を見てはやては目を見開いた。26450円。どうやら、額を一つ間違えたみたいだ。それに、買った服もそれなりに多い。あちゃ〜、とはやては頭を抱えた。気に入った服を諦めなければなかった

「てなわけで、はい」

「30000円からお預かりします」

「あっ」

気づいてからでは遅い。既に悠也はお釣りをもらいポイントカードを受け取り、袋に入った服を店員から渡されていた。それを見たはやては頬を膨らましてそっぽを向いていた。それに苦笑いしながら悠也は五階を目指して歩みを進めた。

|||||

悠也とはやては雰囲気の良いレストランに入っていた。平日の昼下がりが、学生はいないわけで店にはいつている客は少なかった。まあ、それでも一般の客や会社の昼休みを利用して来ている者もいるので、客足は決して少ないわけではない。そして、目の前に座っているはやてはといつと……

「……………」

「はあ〜」

未だに拗ねているのだが、頼ったに付いたソースでは可愛らしいだけだった。

「いいかげん機嫌直してくれよ?」

「ぶゝ、だってまた悠也に払わせてしもたし……ん」

はやてが言うように、悠也と一緒に買い物に出かけたら悠也は何も言わずに代金を支払い、何事もなかったかのようにまた買い物が続けてしまう。事実、はやては財布の紐を解く無い。気が付けば悠也が支払ってしまうのだ

「ま、そこは年長者の顔を立てるってことで……な?」

サンドウィッチセットとスペシャルお子様ランチを食べ終わった二人は店員にデザートを頼んだ。暫くすると、やってきたチョコレートパフェとコーヒージェリーを前にしてはやての方を見るとパフェをチラチラと見ながら悠也の事も見ている。

「デザート食べてからでいいか」

その言葉を待っていたのだろうか、はやては拗ねた表情から一遍し

花を咲かせた。

そして今度は逆の頬っぺたにクリームをつけた。

## 第1話（後書き）

早速、ご都合主義が出てしまいました。

原作キャラと自然に絡める事が今の私の文才力では余りにも難し  
ぎたのです。

はやてファンの方、すいません



## 第2話（前書き）

皆さん、小説は好きですか？

私は好きです。気に入った小説であれば一冊3時間程で読んでしま  
い、受験勉強なんてほったらかしです（笑）

## 第2話

頬つぺたクリーム事件から一週間後、悠也は自宅のソファで煙草を吹かしていた。

季節は春を終えようとしている。五月も中旬にさしかかった。

「ご主人様、またサーチに反応がありました。高町なのは嬢です」

「またか」

紫煙を吐きながら悠也はあの日の夜を思い出した。

桃色の光を身に纏った少女、高町なのはが黒いモノを砲撃魔法によって撃破、封印したのだ。その日の夜は結界魔法などは一切使用しておらず、なのははその場所を逃げ出した。

それから、なのはは日中であつても夜中であつても青い宝石・ジュエルシードを封印し始めた。これらの知識は、アカレラから教えてもらったのだ。

後は自分で見たり、実際にその現場にも居合わせたことがあるのだが、基本的に悠也は面倒事が嫌いである。これは誰にでもいえることだろうが、意味の解らないジュエルシードに関わりたくなかったのだ。過去のオーバーテクノロジーが詰まったジュエルシード、黒いマントの少女、時空管理局の執務官。それに、自分の生まれやジャンパーとしての能力。厄介極まりない代物だ。

「どうするのですか？」

「ま、危険なことになったら教えてくれよ。後始末は出来るから」

「畏まりました」

そう、悠也はなのはがジュエルシードを封印している時に一切協力をしなかった。

さつきも述べた通り、面倒事は嫌いなのだが世話になっている高町夫妻の娘。もしなのはが街を破壊している所を一般人に知れば間違いなく数千万の金が動く。それに、この世界には無い魔法という力。下手をすれば高町家は実験対象にされてしまうかもしれないのだ。

そこで、悠也が取った行動はアカレラの魔法登録に記されていた唯一の結界系の魔法『人払い』この魔法は空間自体を切り取るなど、そこまで難易度の高い魔法ではなく何故かこの方向に行きたくない別の道で目的地に行こうとさせる精神的な魔法だ。

もつとも、それ以前に中にいた一般人にはなんの効果もなく悠也が無理なアクションを取ったりなどして気を引かせていたのだ。

と言っても、これは執務官やフェレットが結界をはって意味を無くしたのだが……

「はあ、学校か……」

机の上で振動している携帯を見て、ため息を吐いた。

|| || || || || || || ||

悠也が通っている公立の中学校に着いたのは10時前だった。

当然のごとく、悠也は自分の教室に着く前に担任の手により指導室に直行。説教の嵐だった。なぜ学校に来ないのか、煙草は止めたのか、喧嘩はしたのか等々、昼前まで説教は続けられた。これが高校なら即時退学という処置を取ったのだろうが、ここは中学校。義務教育という枷に中学校側は説教という処置を取っただけで、それだけだった。それに悠也の家庭環境は複雑だった。両親は居ない。さらに両親が残した遺産を求めて親戚が悠也に対してどんな行動をとったのか、それは全て担任は知っている。

「まったく、お前という奴は……」

「……………」

「せめて学校に来て、俺たち大人の目の届く範囲にいてくれ」

「……はい」

長テーブルを挟んで、担任は立ち上がった。手には携帯電話が握られている。

今の時間は授業中だが、説教の時間が長引いてしまったために四限目は始まってしまっている。こんな時間帯から授業に参加させようとは思わないようだ。

「お前も何か食うか？」

「何でも良いですよ」

「なら、翠屋の昼食セットでも頼もうかな。あそこのランチは美味いからな」

「あそこ、出前してましたっけ？」

ニヤリと笑い、携帯の番号を押し始めた

「お前が居るから頼めるんじゃないか」

「そっつすか」

呆れた。あの夫妻はいったい何をしているのだろうか？

そうしている内にも担任は注文していた。そして、悠也に携帯を押し出してきた

「なんですか？」

「お前にだよ」

頬が若干だが、いきついたと感じ取れた。渡された携帯を取り、耳に当てる

『やあ、悠也君。学校にいるんだって？』

電話の向こうは、高町士郎さん。桃子さんの旦那にあたる人だ

「いや、まあ暇だったんで」

『あまり先生を困らせるなよ？それで、何が食べたい？』

「じゃあ、コーヒーセットで」

『君は大人だな。よし、飛び切り美味しいコーヒーとオムライスを持って行ってやろう。代金はなのはの家庭教師だ』

「マジですか？」

『マジだよ。じゃあ、先生に代わってくれないか？』

何故かブツブツ言っている担任、八雲に携帯を返した。この人は、まあいい人だ。何かとよくしてくれる八雲は、他の先生からは嫌われているのだが生徒からは高い評価をもらっている。と、言うのも普通の教師なら不良は避けて

通りたい所だが八雲は違う。煙草を吸っている生徒が居れば即座に没収し、説教。授業を受けていない生徒がいれば強制的に参加させるなど、まともに接してくれる大人など滅多にいない不良に、普通の生徒と何ら変わりなく接してくれる大人。

普通の生徒には、よく恋愛相談に乗ってくれる人生の渋い先輩。詰まるところ、八雲は子供たちの事を考えて指導しているのでこの大人を嫌う子供など、この中学校にはいないのだ

「では、よろしく願います。ええ、任せてください。はい、では」

携帯をポケットに突っ込んだ八雲は、胸ポケットから煙草を取り出した。

「生徒の前で吸うんですか？」

「お前は既にヘビースモーカーだろ」

この指導室は教師陣が喫煙所として決めた部屋として使われている。この部屋が使われている時は別の喫煙室に指定されている部屋を使うのだが……

「どうだ、チェスでもするか？」

机の下から取り出したのは、くすんだ色の盤に駒。昔あったチェス部の残り物だそう。折り畳み式のチェス盤を開くと一枚の紙切れと鉛筆が出てきた。そこには『Y10K12』と書かれており、これは二人のイニシャルを意味する。

「俺が勝ったら毎日学校に来てもらうからな」

「俺が勝ったらこのうつつとうしい敬語は無しで。」

敗者は勝者に従う。シンプルなルールで、開始されたチェス。これまでのボードゲームでは、一回目は悠也の勝利で没収されていた煙草の返却。二度目は八雲の勝利で煙草の没収。三度目四度目は悠也の勝利で高級すし屋で奢ってもらい、四度目は八雲の奥さんに昼食を作ってもらった。そして22回目には悠也は負け、八雲に対し敬語を使うように言われたのだ。そして23試合目が今、始まる……！



|||||

「……なにをやっているんだい？」

目の前の光景が信じられないといった風に見ているのは、つい三十分前に出前を頼んだ翠屋の店主 高町士郎その人だ。

「こんにちは士郎さん。いい匂いですね」

「まあ、コーヒーだからね。それで、なんで八雲君がこうなったんだい？」

「これ」

悠也が指をさした方向にはチェス盤があり、その上にある駒は黒のクイーンが白のキングに対してチェックしていた。その傍にはナイト、ポーンと固められており白のキングに逃げ場はなかった。つまり、白の八雲の敗北。悠也の勝ちで八雲の負け。ここに敬語の制約はなくなったのだ

「はい、オムライス。コーヒーは今淹れるよ。ほら、八雲君も淹れ

「てあげるよ」

「あ、ありがとうございます」

持ってきたバスケットから魔法瓶とカップを取りだし、翠屋で粉末状にした豆を紙に落とす。そしてお湯を少しずつかけ始めた。部屋に広がるコーヒーの香りに、煙草の匂い。復活した八雲が煙草を吸い始めていたのだ。

「あゝゝゝゝ、クソ」

「子供に負ける大人はかつこ悪いな。奥さんに言いつけてやるよ」

「ちよ、待てよ!?!」

取り出した携帯を取り上げられてしまい、ついつい舌打ちをしてしまう。それを見て苦笑いを零す土郎さん。カオスな空間は、放送で八雲が呼び出されるまで繰り返された。

|||||

放課後、悠也は翠屋に訪れていた。理由は簡単だ。食器を返すためだ。カランカランと扉を開けると同時に聞こえてくるベルの音を聞きつけた桃子さんが奥から顔をだした。

「あら悠也君、いらっしやい。奥に席があるから」

と言われても、店内は既に学校を終えた学生が甘味を求めて翠屋に來ている。それも店内の席が全て埋まる様な繁盛ぶりだ、普通は席が空いているとは思わないだろう。

実際、外にも待っている学生は数人いる。店の奥に歩みを進めると、一席だけ白い紙が立ててある席がある。紙には予約席と書かれており、それを見た悠也は表情が緩んだのを感じた。席に着くと、二本の明るい茶色の触覚がひよこひよここと店の奥から出てきた。暫くキョロキョロした触覚は明らかに悠也の方を見て動いた。

「そして茶色いゴキブリはやってきた」

「にゃっ!?!何言ってるの!」

「そしてゴキ.....」

「違っつてばあ~~~~!~!~!」

「なのは、皆が注目してるぞ?」

「はうっ」

店内の静けさに気づいたのか、なのはは慌てて悠也が座る向かいの席に座った。

運よく、お盆に乗ったコーヒーは零れなかったようだ。

「クッ」

「わ、笑わないで」

お盆に乗ったコーヒーを取り、一口。やはり、翠屋のコーヒーは美味い。香りもいい。目の前に座り、顔を俯けているなのはは耳まで赤くなっている。

「ほら、これでも飲んで落ち着け?」

「あ、うん……っつて、苦いっ!?!」

当たり前のリアクションだ。ブラックコーヒーを飲める九歳児など

地球上に存在しないだろう。コーヒーと一緒に運んできたオレンジジュースを慌てて飲みだし、やっと落ち着いたみたいだ。

「悠也が意地悪するの」

「おや、悠也君にはこれから店の手伝いをしてもらおうかな？」

「おっつ！？」

ふと気が付けば隣に立っていた土郎さんに驚きながらも、今言った言葉を頭の中で反復する。店の手伝い？

「マジですか？」

「マジだよ。今は忙しいからね、はいエプロン」

手渡されたのは黒いエプロン。逆に取られたのははやての誕生日プレゼントが入った袋と食器。店内には未だ注文した品を待っているお客さん。外には、翠屋に訪れた時よりも増えた女学生の姿が見えた。

「報酬はシュークリーム三つで」

「それくらいなら安いモノだよ」

こうして悠也は店の奥に消え、完成したケーキや飲み物を運んで行った……

|||||

ドアに掛かっているプレートを裏返したのは、夜9時を過ぎてからだった。

休む間もなく働いた悠也はだらしもなくテーブルに突っ伏していた。流石に5時間も休みなく働けばへばってしまう。これで報酬がコーヒーにシュークリーム3つなど割に合わない。

とは言え、いつも世話になっているのだから何も言わない悠也なのだ

「お疲れ様。シュークリームは置いておくよ」

「ああ、ありがとうございます」

「それにしても助かったわあ。どう？高校生からバイトでもしない？」

士郎さんと桃子さんがコーヒートシュークリームが入ったであろう箱を持って悠也の向かいの席に座った。桃子さんの誘いをやんわりと断りながら席を立った。こんな時間だ。はやても寝てしまっているかもしれない。なのはも7時には家の方に入ってしまったきりで店には出てこなかった。

「もう帰るのかい？」

「ええ、また来ます」

「明日も学校に行きなさいよ」

「はは、頑張ります」

まだ寝ていないことを祈りながら悠也は八神家に足を進めた。家にはシオンが腹を空かして主の帰りを待っているだろう。紫煙を吐き出しながら、空に浮かぶ月を見上げる。満月の夜は静かで、不気味とも言えた。頭の中ではやての家の前をイメージ。悠也はジャンプした

## 第2話（後書き）

私事なのですが。

ここまで連続で投稿してきました。ですが、次からは週に一回か二回程度に投稿したいと思っています。プロットがある分なら続々と投稿できるのですが、私は学生で受験生です。

とは言いつつも、投稿とかしちゃってますが（笑）

あ、そう言えば土郎さんの話し方とか桃子さんの話し方はこれで合ってますか？

もし違うのならば言うてほしいです



### 第3話（前書き）

あれ〜？なんか同じ様な話になってしまったような……

### 第3話

よく行く図書館から借りていた本を、ソファアに座り呼んでいた悠也は振動している携帯に気づき手に取った。携帯を開いてみると、既に電話は十回メールは五件以上来ていた。

今日は土曜日なので何ら咎めらる様な事は無い筈なのだが。そう思いながら、なぜ報告してくれなかったのだと胸元で一定のリズムで点滅するインテリジェンスデバイス、アカレラを指で弾いた。

その時「んあっ!？」と聞こえたがこの際、無視しておこう。着信履歴を見ると、高町士郎と高町桃子。高町なのは。というより、高町家から電話が来ていた。メールも同じようなもので、一つを除けば後は高町家だった。

「忙しいから手伝って?」

今日は土曜日で、世間一般には休みなのだろう。そして、その休みを利用して手ごろな値段で美味しいランチが食べられて、コーヒーを飲もうと翠屋にやってくるお客さんが予想以上に多くて手が回らないのだろう。翠屋は個人営業なもの、雑誌にも載ってるくらいに評判はいいのだ。それに、桃子さんは美人で士郎さんはイケメンときた。この二人が目的なお客さんも少なからずいるのだろう。全ては推測に過ぎないが、大よそは当たっているだろう。

「アカレラ、今度からは教えてくれな?」

「はい、畏まりました」

動きやすいジーンズを履き、黒い長シャツを着た。そして、胸元には蒼いネックレス。左耳にはシルバーのイヤリングを着けた。外は快晴だ。だが、季節は四月と陽気な気温ながら少し肌寒い。薄手のパーカーを羽織、悠也は家を出た。

|||||

やはりと言うべきか、翠屋の中は女性客で席が埋まっていた。それは店の外にも続いている。いつか見た光景だった。悠也は翠屋のドアを開け、そのまま厨房へと入った。

「あ、やっときてくれたわね？」

「はい、本を読んでいたら携帯を見るの忘れてて・・・」

「ふふ、そこは悠也君の良い所の一つよ？」

ふわりと、大人の笑みを浮かべる桃子さんは黒いエプロンを悠也に手渡し、かわりにパーカーを受け取った。すぐさまエプロンを装着して、ペンとメモ帳をエプロンのポケットにいれる。

「ねえ、やっぱり家で働かない？」

「中学生を勧誘するのは大人としてどうなのでしょうかねえ？」

「あら、貴方なら十分に高校生として通用すると思うわよ」

「……なのはの援護に行つてきます」

「あらあら」

視界の隅で、後片付けと接客に悪戦苦闘しているなのはを捉えた悠也は咄嗟に身を翻して厨房から出た。

厨房から出た悠也は、早速お客さんに捕まえられた。一人は茶髪の女の子で、もう一人は黒髪の男の子だった。身長的に男の子は弟が彼氏だろう。

「新人さん？」

「まあ、たまにヘルプ……忙しい時に手伝いに来ている程度なので」

「そうなんだ。あ、私このショートケーキとオレンジジュース。ク  
ロノは？」

「僕は、ガトーショコラとコーヒーで」

「畏まりました。ショートケーキとオレンジジュース。ガトーショ  
コラとコーヒーでよろしかったですね？」

「はい」

メモを取り終えた悠也は、そっとその場を離れ厨房にいる桃子さん  
にメモを渡した。

|||||

時刻は午後7時。翠屋の入り口のプレートは既に裏返っている。  
悠也は、なのはと一緒に椅子に座ってコーヒーを飲んでた。なの  
はは勿論コーヒーなんて飲んでいない。と言うよりも飲めない。オ  
レンジジュースだ。

「……ふう」

「疲れたの」

「まさか、土郎さんと恭也さんに美由希さんが皆いないなんて」

「ふにゅ〜」

机に突っ伏したなには同情せざるをえないだろう。女の子で9歳児がお昼から少しの休憩を挟んだだけで働いていたのだ。悠也の手は、自然になのはの頭に伸びていた。

そのまま頭を撫でているが、なのははされるがままで抵抗も何もしない。疲れすぎたのだろうか？

「大丈夫か？」

「……ねむ」

「じゃ、こんな所で寝たら明日が大変だぞ」

「うん」

オレンジジュースそのまま、なのははフラフラと覚束ない足取りで

店の奥に入ってしまった。  
その数分後、桃子さんがなのはが座っていた椅子に座った。

「お疲れ様。はい、これバイト代」

桃子さんは封筒をテーブルに置き、残っていたオレンジジュースを飲んだ。

封筒の中身は、確実にお金が入っているだろう。だが、悠也は封筒を桃子さんに渡した。

「受け取れませんよ」

「ダメ」

「お世話になっている人からお金なんて、受け取れません。そもそも、バイト代が目的で手伝いに来たわけじゃありませんから。」

これは、別に今日が初めてと言うわけではない。悠也が手伝いに来ると、その日の終わりに必ずと言っていいほど渡してくるのだ。それも、普通のバイトで手に入る額じゃない程にだ。

今回もそうなのだろう。だから悠也は受け取れない。そもそも、受け取る事が出来ないのだ。

「もう、だつたら翠屋のスペシャルコースでも持って帰る？」

「そうですね……そうします」

「はあ、家の子は素直じゃないのよね。なのはも、悠也君も」

いつ、俺が高町家の子供になつたのだろうか？と心で思いながら、悠也は翠屋のスペシャルコースをどうしようと考えていた。翠屋のスペシャルコースは12種類の色とりどりのケーキだ。季節に合ったケーキや、翠屋自慢のケーキ。それに先行版と称して試作段階のケーキが入っていたりするのだが、かなり美味しい。数日後には店に置いていたりする。

「それじゃ、取ってくるわね」

厨房に戻る桃子さんは三児の母とは思えないくらい活発だ。いや、三児の母だからこそ活発なのか？そんな疑問を余所に、悠也はコーヒーを飲みほしパーカーを羽織った。

これからくる、翠屋スペシャルコースを楽しみにして……



### 第3話（後書き）

はい、ファイターです。土郎さんや桃子さんに対しての不満はある  
かもしれませんが、この話は二次創作です。口調は、まあ勘弁して  
ください（笑）

伏線……伏線になるのかな？

## 第4話（前書き）

暑いですね。暑くて体が解けそうなファイターです。  
短い文章ですが、長く出来るように頑張っていきたいです。

## 第4話

神崎裕也は、翠屋スペシャルコースの入った箱を手に八神家にお邪魔していた。

まあ、実際は翠屋スペシャルコースの事をはやてに話したら「食べたい！」と電話されたのだが。

「太るぞ」

そのはやては、今まさに4つ目のケーキにフォークを突き立てた所だ。いくらなんでも食べ過ぎだと思う。女の子は甘いものは別腹と言うのは本当なのだろうか？

昼食を食べ終え、今はブレイクタイムと洒落込んでいるのだが見ているだけで口の中が甘くなる。

「そんなん、レディーにいう事とちゃうで？」

「自分の事をレディーって言うなら、もうちょっと歳とらないとな」

「老いは女の敵やー！」

こうしている間にも、ぱくぱくケーキが口の運ばれてゆく。一体、その小さな体の中にどれだけ入るのだろうか。そんな疑問を頭に浮

かべながら、悠也は残り7つになったケーキをはやての目の前から取り上げ冷蔵庫に入れた。それを見たはやては、頬を膨らませている。

悠也は静かに中腰になり、はやてと目を合わせた。

「？」

「つまめる」

「ひゃあっ!?!」

服の上から、はやての贅肉……横っ腹を掴まんだのだ。ものの見事に掴まてしまった横っ腹に、はやては少ししょんぼりし、車いすを移動させた。そして、普通より高い位置にあったゲームを起動させた。プレスカ2だ。ディスクは敵をバツバツと倒すことの出来る無双系のゲームで、ストレス解消にはもってこいのゲームだ。

「俺もやるっかな」

「ふふふ、乙女の心を踏みにじった罪は大きいでえ？」

「何時も負けてる奴が何言ってるんだか」

はやての隣に座ると、悠也もコントローラーを手にした。もともと、買ったのは悠也なのだ。それをはやての家に置きっぱなしにしている。

テレビの電源を起動させると、既にメニュー画面に入っていた。はやてが操作すると、キャラ選択の画面に変わり、それぞれ使うキャラを選ぶ。悠也が選ぶキャラは作中一番のスピードを持ったキャラ、双剣を操るラグナと言うキャラだ。それに対し、はやてが選ぶキャラは作中一番の火力を誇る大魔術師ミスト。悠也がスピードで攻撃を躲すのに対し、はやては殲滅魔術で一つのエリアごと攻撃する戦術。

ステータスだけで見れば、どちらが勝つかは解らないだろう。

今、その戦いが始まる！

|| || || || || ||

「はあ、はあ、はあ、もうデカい魔術は使えまい？」

「ふふふ、そういう貴方も剣を一つ失い大事な足に傷を負っているじゃない。」

互いが満身創痍だった。ミストは殲滅魔術を三度も使わせられており、魔力も底を尽きかけていた。対するラグナは、自身の双剣に對魔力と言うステータスを持つが、三度にわたる大魔術を目の前にしては意味を成さず剣が一振り碎け散ってしまったのだ。

さらに、もう片方の剣には罅が入り足にも決して軽くない傷を負ってしまい、今もなお出血している。土地の方に関しても、初めは緑豊かな草原だったがミストの使う殲滅魔術によって形を変え荒野となっていた。

ラグナは足に力を込めた。傷が痛む。だが、そんな些細なことを言っている場合じゃないのだ。

いずれラグナは倒れる。出血が止まらないのだ。今すぐにも治療する必要がある。ミストの方は至って外傷が無いように見えるが、その美しい顔は苦痛に歪んでおり額に水の粒がある。

残った一本の剣を眼前に構え、打ち出された弓矢の様に駆ける。

ミストとの距離は十メートル前後。奴が魔術を行使する前に腕を切り落とし、殺さなければならぬ。ミストが詠唱を始めた。

奴の右手がこちらに向けられ、周りのマナが収束されてゆく。

マズい！あれが完成する前に奴を切り伏せねば！！

駆ける、駆ける、駆ける。奴との距離はあと五メートル。自分の間合いは狭い。それが今となっては齒がゆい。

後、三メートル！

奴の顔にも焦りが見て取れる。

後、二メートル！

間合いに入った！さあ、これで終わりだミスト。覚悟しろ。

その時、光が世界を包んだ気がした。続いて聞こえる爆音と衝撃。そして、自分の体から

命が抜けてゆく感覚。ああ、これが……死

|| || || || || ||

「勝ったあ〜〜！」

「あ〜〜〜!!!?!」

隣では満面の笑みを浮かべてはしゃぐはやて。悠也は、まさかの展

開に声が出てしまった。悠也の視線の先では、ピクリとも動かないラグナ。その少し離れた位置で、来ていたローブがビリビリに破れてはいるが立っているミストの姿があった。

勿論、画面の上部では<1PW IN!>の文字が目立つ色で表示されていた。

そう、悠也は負けたのだ。僅差の差で負けたのだ。ミストのHPは残り16で、MPは3。

ああ、悔しいな。だが、隣で嬉しそうに笑っているはやてを見ると、そんな気持ちは吹き飛んでゆく。そんな笑顔を見せられたら、悔しい気持ちも無くなる。

悠也は立ち上がり、ヤカンに水を入れてIHの上に置いて火を入れた。家から持ってきたカップに、ドリップバックコーヒをセットした。そして換気扇の強のスイッチを押し、ポケットから煙草を取りだしジッポで火を着けた。唯一、家の中で煙草の吸える場所だ。

「あゝ、負けたからって吸ったあかんよ？」

クスクスと笑いながら誇らしげに悠也を見てくる。勝者の表情だ。

「はあゝ、まさか負けるとは思ってなかったんだよ」

「さあゝ、今回はなに教えてもらおかな？」



「うっ」

はやての笑みは変わらない。腕を組んで何かを考えているようだった。

実は、悠也ははやてとも勝負をしていた。それは、不良教師の八雲と同じようなルールで負ければ勝者の言う事を一回だけ何でも聞くということだった。その一回は、もしもはやてが「今日から悠也は私の事をお嬢様と言う事」と言えば次の勝負まではそれが続くのだ。現に、悠也もついこの間までは八雲に対して敬語を使っていた。が、今はその制約から解放されて敬語など一切使っていない。

さて、はやては一体どんな事を言うのか。この前は翠屋のケーキを買ってきてというパシリだった。まあ、悠也が負けることなどは偶にしかない事なのだ。勝率は7対3。いや、8対2くらいだろうか。ヤカンから特徴的な高い音が鳴り、沸騰した事を知らせる。

初めは少しだけ熱湯を淹れ、蒸らす。それから1分ほど待ち、どんどんと熱湯を淹れてコーヒーを完成させた。湯気が上がり、それがどれだけ熱いかを悠也に知らせしめている。

息を吹きかけ、コーヒーを啜る。ほのかな香りと苦みが口の中を襲う。美味い。

こうなれば、無粋な煙草は要らない。携帯灰皿に煙草を押し込み、再度コーヒーを啜る。

やはり、美味い。3口目を飲もうという所で、はやてが口を開けた。

「決まったで、悠也！」

「おう、なんだ？」

「私に隠してるモン見せて」

思わず口に含んでいたコーヒ―を吐き出すところだった。

## 第4話（後書き）

主人公のフルネームは初めてだったでしょうか？

主人公の名前は神崎悠也かんさきゆうやです。

もしかしたら文字化けしているかもしれない。どうか、その場合は報告してください。

感想まってまゝす！

## 第5話（前書き）

もう少ししたら、現在のPCをメンテに出そうと考えています。  
7のくせに反応が遅いんです（笑）

## 第5話

悠也は、はやての顔を見た。ニコニコと笑っている。

「……………例えば、どんなこと？」

「うん、そうやなあ……。あ、実は悠也は人知れず平和の為に戦うヒーローだったり」

その言葉に、悠也の脳裏にザーーと不愉快なノイズが走った。だが、それは直ぐに収まる。はやては話を続ける。

「実は凄腕のハッカーだったり」

どういう設定だ、俺は。小説を呼んでいるからだろうか、はやては止まらない。自分の世界とは違う世界に行って勇者やってみました。とか、不思議な超能力がある。とか、全て小説で得た知識なのだろう。その顔には笑顔が溢れている。

「なら、飛び切りの秘密を教えようか？」

「うん！」

「実は、俺は……」

「うんうん」

「俺は……」

『アカレラ、セツトアップできるか?』

『よろしいのですか?』

『何時かは教えようと思ってたんだ。空と一緒に飛んでやろうかとも考えていた』

『ですが……』

『大丈夫だ。はやては信用できるし、誰にも話さない』

アカレラは、はやてに魔法を教えることは反対らしい。だが、俺はやはてに教えることはいいと思う。何時までも原因不明の病気で車いす生活なんて退屈だろう。一緒に空を飛べるかもしれない。

『畏まりました。』

アカレラと念話をしていたからだろう。ずいぶんと近くにはやての顔があった。  
不満が見て取れる。

「もったいぶらんと、はよ話してや!」

「クツ、そんなに気になるか?」

「当たり前やん」

「じゃあ、庭に移動しよう」

少し戸惑っているはやてを余所に、悠也は車いすを押してテラスに続く窓を開けた。  
そこに置いてある洒落たテーブルには一つの灰皿が置いてあるだけだった。

悠也はまだ歩く。その先は、芝生が生えている庭がある。はやてを抱きかかえ、椅子に座らせた。そして悠也は庭の中心に立った。

「ぶっ、はやく！」

「はいはい。もうちょっと待ってくれ」

『アカレラ、封鎖結界。いけるな？』

『当たり前です』

「見とけよ、はやて？」

「さっきから見てる！」

少し引つ張りすぎたみたいだ。だけど、心して見てくれよ？

「封鎖結界」

瞬間、世界が静寂に包まれた。と言っても、範囲は八神家の敷地なのだが。

封鎖結界は、外から完璧に隔離される結界だ。アカレラの中に入っていた唯一の結界魔法だ。



「ほえ〜〜」

案の定、はやては口をポカんと開けて放心していた。当たり前だ。魔法を知らない人間から見れば、今の現象は正しく夢の世界に迷い込んだ一般人なのだから。だが、これだけで放心しては困る。

「ほら、まだあるぞはやて」

「うえ？」

「我が望みは一振りの剣<sup>ツルギ</sup>。全てを切り伏せ、全てを救う剣。我が望みに答え、その力を今、この手に！」

悠也が光に包まれ、次の瞬間には光は魔力粒子として舞っていた。はやては目を見開いた。悠也の手に握られているのは一振りの西洋剣だ。そして、悠也の恰好も変わっていた。

黒のジーンズに黒い長袖だった服装は、今は動きやすく、ゆとりのあるズボンにブーツ。

ピチっとしたインナーの上に真っ黒なローブを着ていて、手にはこれまた黒い手袋をして

いたのだ。まるで、小説に出てくる黒い魔法剣士の様だった。

また驚いて放心しているはやてに、悠也は笑みを浮かべて言う。

「どうだ？」

ズルい、とはやては思った。

こんなものを見せられて、驚くのに決まっているのにそれを見て楽しんでる顔だ。

「す、すごい」

だが、口から出てきたのはこんな言葉だった。それも止まることを知らない。

「すごいすごい！すごい！！」

「クツ。さっきから凄いしか言っていないぜ？」

「だって、すごいんやもん！」

クツ、と悠也はまた笑った。喜んでもらえて何よりだ。

「じゃあ、少しだけ散歩しようか」

『アカレラ、封鎖結界解除。続いてステルス』

『畏まりました。封鎖結界解除。ステルス展開』

え？とその言葉が出る前に、はやては浮遊感を覚えた。そして、左半身に温もりも感じた。悠也の顔がかなり近くにあるのだ。所謂、お姫様抱っこ。

「（あ、悠也の匂い……）」

「はやて、ほら、あっち見てみてくれ」

「え？」

少し呆けていたからだろうか。浮遊感を忘れ、悠也の胸に顔を埋めていたからだろうか。

眼前に映る景色に、はやては心を奪われた。

街が見えたのだ。少し探せば、いつも通っている図書館が見つかり、翠屋も見つけることができた。

なぜ？その答えは簡単だった。浮かんでいる。飛んでいるのだ。

「きゃっ！」

「あらら、怖かったか？」

悠也にしがみ付き、やがて悠也の匂いが鼻孔を擦った。安心できる匂いだ。私は犬か何かか。そんな事を考え、はやては口元に笑みを浮かべていた。少し余裕が出てきた。

もう一度、はやては空から街を見渡した。悠也の暮らしている高層マンションも見つける事が出来た。そして、なにより紅い太陽。夕日だ。

「綺麗……」

「これが俺の秘密。他の皆には内緒だぞ？」

「う、うん。」

はやては綺麗に沈んでゆく夕日を見ていた。普通の家からは絶対に見えない綺麗な夕日。

この日、悠也ははやてが飽きるまで夕日を見ていた。

|| || || || || || ||

夜、はやては自分のベッドに横になり心が震えるのを感じていた。まるで、世界のヒーローに会ったかのような昂揚感だ。ある日、突然出会った神崎悠也という年上の少年。あの日の事は生涯忘れないだろう。

あの日は、一人で公園にいたのだ。他の子供たちが遊ぶのを見て、いいなと思う気持ちと嫉妬感が心を支配していた。友達と呼べる友達もない。寂しかった。

知り合いも、遠くの親戚と石田先生くらいだ。だけど、そんな時に悠也は話しかけてくれた。確か、もうその時から口には煙草があったと思う。ベッドの上でクスツ、と笑いが零れる。

「こんな所でなにしてた？」

そう、こんな感じで話しかけられんだ。煙草を吸っているだけで少し怖かった。だって、小説には悪役が吸っているから。これが初めて出会った時の第一印象とかいうやつかな？

けど、この時の私には「またか」と気持ちがあつた。車いすは珍し

いから、単なる興味本位で近づいて離れる。車いすに乗ってから、こんなことが何度もあつたのだ。だけど、悠也は違った。悠也は、私の手を取って遊んでくれた。ブランコにも乗せてくれたし、滑り台も滑った。シーソーは流石に無理やったけど、砂場でも遊んだ。久しぶりに外で遊んだ。嬉しくて、涙が出そうだった。時間なんか止まってほしかった。

けど、時間は止まってはくれなかった。

「もう、帰らないと」

「……………」

「ほら、手を洗おう?」

抱きかかえられ、水道の近くまで連れて行かれて手を洗った。嫌だった。帰りたくなかった。楽しい時間が無くなる様な感覚だ。

「いやや」

「え?」

「帰りたくない！一人は嫌や！！」

その時、名前も知らなかった悠也が初めて困った様な顔をした。そして、言い聞かせる様に頭を撫でてくれた。

「じゃあ、明日もこの公園に来よう。俺もここに来るから。ね？」

「……ほんま？」

「うん、ほんと。次は、そうだね。一時に来よう。明日は晴れだから、もうちょっと汚れても良い様な服だね。」

視線を落とすと、砂で汚れていた。けど、こんなのは気にならないくらい嬉しかった。

「うん、うん！」

「いいいだ」

またクシャ、と頭を撫でられた。不快な感じはしなかった。むしろ、

気持ちいいとも感じていた。また抱きかかえられると、車いすに乗せてもらった。

「あ、送っていいんか？」

「うん、ええよ！それより、明日も遊ぼな！」

素直に送ってもらえばよかったと、今になって思ってしまう。それだけ、嬉しかった。

「そっか。じゃあ、また明日！」

「うん！…あ、名前！」

二時間は遊んでいたのに、まだ悠也の名前を聞いていなかった。友達になる為に絶対に必要な事を忘れていたなんて、相当舞い上がっていたのだろう。少し頬が熱いのを覚えている。けど、悠也は少しだけ「クッ」と笑って言う。

「俺は神崎悠也。君は？」



「私は八神はやて！」

「そっか、はやて。また明日な」

「うん！悠也もまた明日！」

手をブンブンと振る。悠也も手を振ってくれた。ただ、嬉しかった。そして、ありがとう。

それが二年前。あの出会いが無かったら、私はどうしていただろう？アカン、嫌な感じしかせえへん。そして今も私の事をかまってくれる。それに、悠也との秘密も出来た。

## 魔法

凄かった。私も使いたいな。

意識は徐々に薄れてゆく。ああ、言っの忘れてた。

ありがとう、悠也

## 第5話（後書き）

どうでしょう？

自分が幼少期に車いすに乗っていたら、こんな感じになっていたかもしれません。寂しい気持ちに、なんで自分だけがこんな！って感じで。

さて、何はともあれ魔法が出てきました。はやても知ってしまいました。

大丈夫でしょうか？

第6話（前書き）

文章が短い……OTL

## 第6話

はやてが魔法の存在を知って十日が過ぎたある日、悠也は八神家の敷地に封鎖結界を張っていた。

形状を言えば、縦に長い封鎖結界だ。上空に伸びる封鎖結界の目的は修行ではない。今回の目的は、はやてに基本の魔法を教えるためだ。だから、二人とも庭に出ていた。

はやてはテラスにあった椅子に座り、悠也は立っていた。

「まずは空を飛んでみたい」

「ん。じゃあ、ちょっと適正を見るから」

「？」

悠也は、はやての正面に移動しゆっくりと、まるで壊れ物を触るかのように膝の上に手を乗せた。

本来なら魔導師の心臓とも言えるリンカーコアのある胸に触ればいいのだが、はやては女の子だ。

流石に許可もなく触れる訳がない。だが、これは初めてのはやてが知る由も無く小首を傾げていた。

「アカレラ、どうだ？」

「……申し訳ございませんご主人様、はやて嬢。」

「え？」

はやての顔から笑顔が消え去り、不安げな表情だ。そんなはやてに、悠也は笑いかける。

「アカレラ、どういう事だ？」

「わかりません。まったく感じ取れないのです。ですが、はやて嬢からは魔力は確りと魔力は感知できます。」

魔力。その単語に表情が和らぐはやてだが、悠也とアカレラは違った。本来、魔力を生み出すリンカーコアは魔導師にとっては心臓、核とも言える大事なパーツなのだ。それは、魔法で故意に隠していなければ容易にどんなモノかがわかる。それが一切わからない。つまり、はやては何らかの形で既に魔法をかけられてしまっているのだ。

「ま、魔力があるならいいか」

「いいのですか？」

「いいんやー！」

少しトラブルが発生したが、小魔法講義の始まりだ。

|| || || || || || || ||

上空の、既に黒い点でしか確認できないはやてを見ながら呟く。

「才能の塊じゃん」

最初の一時間を飛行魔法の基本的な姿勢制御と空間把握能力をアカレラを使って仮想世界で行い、いったん休憩を取った。そして、三十分後には地上から足を浮かす事ができていた。

合計で二時間ちよっとしか経過していないのだ。これを才能の塊と言わず、何と言う。

「俺、三日かかったんだけどなあ」

はやて自身はバリアジャケットを展開していない。いや、展開できないのだ。デバイスは使う魔術師のリンカーコアを初めに登録してから魔力を使うことが出来る。だが、はやてはリンカーコアを確認できないためにバリアジャケットは悠也が代わりに展開しているのだ。

ジーンズのポケットから煙草を取りだし、ジッポで火を着ける。紫煙が空に消える。

いつもなら首からかかっているアカレラは、はやてについている。右手で煙草を持ち、左手をはやてのいる上空に向けた。

「一撃必中……なんて」

黒い野球ボールサイズのスフィアを生み出し、上空に撃ち出した。風を切って撃ち出されるスフィアは、一直線上にはやてに迫っていた。

|| || || || || || || ||

八神はやては空を飛んでいた。比喻でも、なんでもなく空を飛んでいるのだ。

空を飛ぶのは気持ちいい。機会みたいな化学に頼らず、魔法を使って飛んでいる！

「はやて嬢、下を見てください。」

「ん？」

下には、バリアフリーを意識して造られた二階建ての一軒家が堂々と建っていた。そして、何故か二つある二つの黒い点。

「誰かいるのかな？」

「はやて嬢！右に避けてください！」

「え……」

言われるがまま右に移動した。すると、さっきまでいた場所を黒い点が風を切って通り過ぎて行った。かすかに黒い花粉の様なものが漂っている。



「な、なにをしているんですかご主人様は！」

「え、今の悠也がしたん？」

「そうです、ご主人様の魔力光は黒色です！」

何時もはご主人を一番に考えるメイド風の喋り方なのだが、今はご主人に怒るメイドだ。

それもそうだろう。いくら悠也が使用するバリアジャケットを展開しているとは言え、はやて自身は足に重大な障害を抱えている。スフィアが直撃していたら怪我を負い落下。

怪我をしなくても地上200Mから地面にキスすることになる。

「魔力光？」

「魔導師……いえ、ご主人様は正確にはベルカの騎士なのですが今は置いておきましょう。魔導師には個人の魔力光があります。ご主人様が黒の魔力光なら、はやて嬢は白です。」

足に障害を抱えているはやてが飛べたのには理由がある。まず、アカレラの補助が出来る悠也のバリアジャケット。これで長ズボン魔力でコーティングし、簡単な動きが出来るようにした。そして、

はやてが自分で考えた魔力で出来た翼。翼とは言っているが、実際は小鳥のような小さい翼が腰と踝に着いている様なものだ。それに、少なからずはやても長ズボンに魔力でコーティングしている。その魔力の色は白だ。翼も白。

「取り敢えず、今は地上に降りましょう。」

「うん、わかった」

足を下に、ゆっくりと降りる。

アカレラと一緒に悠也に文句を言ってやる。危ないな!と。

「そういえば、もう直ぐ誕生日や……」

はやての表情が、悪戯を思いついた様にニヤリと綻んだ。

## 第6話（後書き）

定期的に更新が出来ています。文の長さは短いですが、どうでしょうか？

他の作者さんは10ページくらい平気に投稿しているようですし、やっぱり短いのかな？

短いんでしょうね。

はやてがヴォルケンリッターが登場する前に魔法の存在を知り、さらには魔法を使っています。

リンカーコア、バリアジャケット、はやての体に関しての独自解釈がありました。

誤字があれば言ってください。感想まっけてまゝです。

## 第7話（前書き）

この話はユーノ君がメインになる筈です！

## 第7話

翠屋の朝は早い。朝は五時に起きて食材の仕込み。それが終われば弁当を作り、娘を起こし変わったフェレットを起こす。これが高町家の朝だ。

「なのは、なのは」

フェレットがベットで寝ている少女、高町なのはを起こそうとすることが起きない。今日は平日の朝7時20分。カーテン越しからは太陽が自分の存在を知ってほしそくに輝いている。フェレットは大きいため息を吐いた。

このフェレット、実は偽物である。

高度の変身魔法でフェレットに化けているユーノと言う少年に過ぎないのだが……

「もう、起きてよなのは！」

「ふにゃー!?」

「ぐえ」

ユーノが大きな声を上げると、なのはは面白いように奇声を発してベッドから転げ落ちた。それに続くカエルが潰れた様な声と光。寝ぼけ眼を擦り、なのはは自分の部屋を見渡した。

「あれ……さっきのは夢？」

「……なのは」

「ひゃあ!？」

聞きなれた声が突然聞こえてもう一度部屋を見渡すが、彼はいない。その時、何かがお尻を触った。驚きの声が上がリ、下を見るとユーノが倒れていた。倒れていたというより潰れていた。

「なのは、どいて」

「あ、ああっ!？」

顔が赤いのがわかる。目の前の少年も同じだ。高町なのはとユーノ・スクライアは顔を赤くしながら階段を下りた。

||  
||  
||  
||  
||  
||

「レイジングハート」

「all right my master」

ピンク色のスフィアが、なのはがさつき飲んだ空の空き缶を打ち上げてゆく。

街から少し離れた小高い丘の上にある公園は人が少なく、利用する人は滅多にいない。

この場所はなのはとユーノ、レイジングハートが見つけた魔法の練習場所だ。

カン、カン、カンと調子よく空き缶が打ち上げられる。

「アクセセルシューター！」

一つだったスフィアが六つに増える。それは空き缶の周りを囲み、ランダムな動きで確実ヒットしていく。だが、同じようになのは顔にも真剣さが増してゆく。さらにスフィアが増えてゆく。八つ。十二。十八。二十四。三十。

「くっ……くっ」

「450hit」

スフィアは加速する。その限りを知らないように、まだまだ加速する。

「I was accomplished with an aim.

I record it and update it」

だが、やがて集中は切れる。

「あっ！」

今まで規則正しく打ち上げられていた空き缶は場違いな場所に弾きとび、元の空間にはスフィアが殺到し互いに相殺し合った。



「593回。記録更新だね、なのは」

ユーノは、レイジングハートを体を支えなければ、今にも倒れてしまいそうななのはに肩を貸してベンチに座らせる。単に魔力が多ければよいという問題ではない。高い魔力は、確かに有しているだけで有利だろう。だが、それを上手くコントロール出来なければ只の魔力タンクに成り下がる。

「ううう、頭が……」

「はい、これ」

痛みに頭を押さえているなのはに、ユーノは持っていたポケリスウエットを渡した。

なのはは、それを飲むことなく額にあてる。

「はあ〜」

「大丈夫？」

「頭が溶けちゃいそうなの」

「ははは」

|| || || || || ||

涼しい風がユーノとなのはを撫でるように吹いた。既に春は終わっている。春と夏の間の期間だ。暫くベンチに座っていると、ユーノの左肩に軽い衝撃が走った。

「え?」

「すう〜……すう〜……」

横を見ると、普段よりもかなり近い位置 - 普段もかなり近い - なのはの寝顔がうつつた。

一瞬で顔が赤くなる。直ぐに視線を戻し、なのはから視線を外す。心臓が高鳴る。そういえば、寝顔を見るのも久しぶりな気がする。

「なんで……僕は」

握りしめた右手を開く。ふと頭をよぎるのは、彼女を魔導師に導いてしまったこと。

もし僕が隣で寝言を言っている少女と出会わなかったら、あのケーキが美味しい店で親友と一緒に幸せな、今と違う道を歩んでいたのではないか。

「はあ……」

こんな事に悩んでいるのに、件の少女は本当にぐっすりと眠っている。

僕だって男の子なんだよ、なのは。

また涼しい風が顔を撫でた。

「風邪ひいちゃうよ」

なのはからの返事は、当たり前前の様にならない。眠っているから。寒いのか、さっき言った言葉を聞いていたのか、なのはは体を完全に寄せてきた。少し落ち着いた筈の体温が、また急上昇する。

「レイジングハート、少しだけなのはを持ち上げてくれる？」

「Ok」

ふわりとなのはの体が浮かぶ。立ち上がり、なのはの体をレイジングハートに運んでもらう。これもこれで恥ずかしい。九歳だということに、背中の柔らかく暖かい感触には赤面してしまう。

「帰ろう」

起こさないように慎重におんぶしながら、翠屋に帰るべく公園を後にした。

|| || || || || || || ||

翠屋に着いたのは既に七時を回っていた。当然、なのはは桃子さんに起こされて説教された。そして、ユーノはと言つと……

「良い湯だ〜」

一人でお風呂に入っていた。最近時は空管理局が誇る時空管理局・巡航し級8番艦。次元空間航行艦船アースラでシャワーを浴びるだけだったから、なおのこと気持ちいい。

「ふう〜〜」

顔の筋肉が自然に緩むのを感じる。と言うよりも、全身の力が抜けてゆく。このまま暖かなお湯に溶けてしまってもいいかもしれない。浮遊感を感じながら目を閉じた。

まるで飛行魔法を使っている時のような、それでいて暖かい光に包まれていて、幸福感が体を、心を満たしていく。瞼の裏側は晴天で、魔力が続く限り飛んでいきたい。

そんな、本当に夢のような仮想空間。けど、そこには絶対に在る筈のない彼女がいた。

天使を意識したかのような白いバリアジャケットに、ブーツからはピンクの翼が生きているように動いていた。何時もならツインテールの髪型なのだが、今日は髪を下していた。

「どっしょ〜ここにいるの？」

「……………」

「ねえ、なのは?」

「……………」

どうして何も答えてくれないのか。  
どうして喋らないのか。

「ねえ、なのはってば!」

「……………」

なのはは無言で僕に近づいてくる。けど、何故か視界がぼやけてくる。ここは僕の仮想空間だ。誰にも干渉される事のない代物の筈だ。

「なのは……は?」

なのはは無言でレイジングハートをバスターモードに変え、圧倒的なまでの魔力を収束し始めた。魔力の集まり方からして、これは彼女の切り札スターライトブレイカーに違いない。星を壊す力……な

んの冗談でそれが僕に向けられているのか。  
それを問う前に視界はピンク色に染め上げられた。

ゆさゆさと体を揺らされる。ゆさゆさゆさゆさ。そっと目を開ける。

「……あ、気が付いた」

目の前になのはがいた。心配そうな、目には涙が浮かんでいる。なにさ、SLBを撃ってきたのはそっちじゃないか。

「どっしたの？」

「え……？」

腕に力を入れて立ち上がろうとするけど、立ち上がれない。と言うよりも、僕は何で寝ているのだろうか。なんで？

「あ、動いちゃだめだよ？ユーノ君、お風呂でのぼせていたんだよ」

「あ……そうなんだ。」

「じゃあ、あれは夢か。うん、そうだよね。だってなのはが僕にあんなことする筈無いじゃないか。する筈……あれ、否定できないな。」

「なんかユーノ君。とっても失礼なこと考えてない？」

「そ、そんな事ないよ!？」

「じと目で見られてタジタジするユーノ。それを陰で見守っている高町夫妻。」

「方やあらあらと、方やユーノ君にならと。」

「そんなことはどうでもいいんだ。だから、だれか助けてください!」



## 第7話（後書き）

崩壊……しっちゃったかな？

因みに、私はユーノ君はなのはちゃんの婿！な方です。はい（笑）

仮想空間は、なのはが魔法の練習を学校でしていた時の仮想空間を想像してください。アクセルシューターの時の頭痛は自己解釈です。いくらマルチタスク？があってもそんなに並行して思考を分けることが出来ないのが人間と言うものです。ただの女の子にそんなことが出来るハズが無いのです。

ただ、魔王とささやかれていますし……SLBなんて拘束ワイワイオしているのに撃ちますし。ともあれ、いかがでしたか？

感想と誤字脱字、おかしいな？と思ったところがあれば指摘してください。

## 第8話（前書き）

少しグだってしまった感じですよ。

## 第8話

「……………ん？」

お腹への衝撃に、悠也は瞼を開けた。視界に入ってくるのは、当たり前の様に知っている天井。視線は下に。

「じゃあ」

気が抜ける。と言うのは、まさにこの事を言うのだろう。シオンが所謂、伏せの状態で悠也を見ているのだ。その瞳は「お腹すいた」「遊んでよ」と言いたげな視線だ。

確かに、最近は朝か夜しか遊んでやれなかった。はやての家に行けば、基本的に自宅に帰って来るのは零時を過ぎる。

「お前も来るか？」

「はい」

シオンを抱きかかえた悠也は、お散歩用バッグをクローゼットの奥から引っ張り出した。

||  
||  
||  
||  
||  
||

肩にかけたお散歩バッグから顔を出しているシオンを見やり、胸ポケットから煙草を取り出した。ジッポで火を点ける。黒いジーンズに、白いシャツ。シャツの上には黒いジャケットを着ている。六月だが、風が吹くと少し肌寒いのだ。時間は十時過ぎ。そして土曜日。この時間帯は、きっと今から行く店は少し混んでいるだろう。

ぶかぶかと口からでる紫煙と煙草から出る紫煙を揺らしながら十分程度歩くと、目的の店が見えてきた。予想道理、翠屋は外から見て分かるように席はお客さんで埋まっていた。チリン、と音を立てて扉を開けると桃子さんが迎えてくれた。

「いらっしゃい。今日はどうしたの？」

「誕生日ケーキをお願いしたいんですけど、大丈夫ですか？」

「あら、誰の誕生日かしら？もしかして、彼女？」

「そんなんじゃないありませんよ。知り合いの女の子です。」

「え〜っと、確か……はやてちゃん？」

「今日が誕生日なんです。」

「そう。なら、まかしておいて。」

そう言って店の奥に入っていく桃子さんを尻目に、悠也は店を出た。誕生日ケーキは、だいたい五時には出来ているだろう。シオンの頭を一撫でして、悠也はデパートに足を向けた。

デパートに入った悠也は、まずシオンをくペットお預かりセンターに預けた。  
>に預けた。  
流石にデパートの中をシオンと一緒に見て回るのは警備員に止められてしまう。

シオンを預けた悠也は、エスカレータを使って二回に上がった。二階には、日用品の他にも色々な物が売っている。今日の買い物は殆どが終わった様なものだが、今から買うものが一番大事だ。誕生日プレゼント。悠也の場合は、僅か五歳にしてプレゼントは貰えない状態になった。と言っても、二度目の不思議な人生だ。不満は無い。

『アカレラ、はやての欲しかったモノって聞いたことあるか？』

『ありません。』

『だよなあ……。男の子だったら仮面ライダーとかで大丈夫なんだろうけど。』

『はやて嬢は女の子です。九歳の女の子と言えば……………』

『言えば？』

『すみませんご主人様。現在、検索中です。』

念話をしながら色々物色していると、ある物が目に入った。

「お、これなんかいいんじゃないか？」

『流石に高いんじゃないやありませんか？』

「んま、いいじゃん。店員さん」

||  
||  
||  
||  
||

全ての買い物を終えた悠也は、チャイムを押した。

「はいはい」

「悠也だけど、入っていいか？」

「あ、やっときた。ええよ」

どことなく自分の名前を自分で言う事に恥ずかしさを覚えながら、悠也は八神家のドアを開いた。すると、まだ玄関だと言うのに料理の美味しそうな匂いが鼻孔を擦った。

八歳だと言うのに既に料理の腕は悠也を超えてしまった。教えたその日から、止まることなく腕が上がっていくのだ。

「おお」

「ふっふっふ」

テーブルを見た悠也に、はやてが自慢げに笑っている。テーブルには、華やかな料理の数々が置かれている。キッチンには、おそらくメインの……シチューだろうか。

どれもこれもが美味しそうで、口の中は勝手に唾液が量産される。

「上達したやろ？」

「本当に凄いな。さっそく一口」



フォークを取ろうとすると、横から出てきた手にヒョイと取られてしまった。  
そのフォークを取ろうと手を伸ばすが、上手い具合に避けられてしまふ。ならば、ともう一本のフォークを取ろうとしたが、フォークは勝手に浮かんではやての手に収まってしまった。  
浮遊魔法だ。

「……こつちも上達したな」

「せやる？」

「落ち込みにくださいご主人様。」

これを落ち込むなと言う方が無理だ。魔法を教えて一か月も経ってないのにも関わらず浮遊魔法を今日9歳になった少女が、苦も無く使うのだ。本来なら、もっと時間をかけて習得する魔法だ。悠也は実際に時間をかけた。

「シオン、俺たちは向こうでテレビでも見よう」

「に」

お散歩用バッグから取り出したシオンを抱きかかえ、リモコンを持ってソファーに座る。

テレビを点けると、ドラマの再放送がやっていた。のんびりとシオンの頭を撫でながら、アカレラと念話をしてしまう。

『アカレラ、はやてのリンカーコアはどうなってる？』

『未だ確りとは確認できていません。魔力は間違いなくあるのですが……』

『だよなあ……ま、使えるから問題ないのか？』

『そいですね。問題は無いと思いますが、スフィア等の魔法は使えないでしょう。』

『使えなくていいじゃないか。』

『その通りでした。すいません』

「悠也？」

没頭していたのか、はやての顔が真横にあった。

「ん？」

「シチューも出来たし、そろそろ食べよ」

テーブルには、湯気を出しているシチューが置かれていた。フォー  
クも元の位置にある。

「よし、食べよう」

「うん！」

悠也はシオンを膝から降ろし、車いすを押しして席に座る。レディー  
ファーストだ。

リンカーコアの事は気にしない。忘れていよう。スフィアを作れな  
くてもいい。

はやてが戦う事なんてあるわけがないのだから。今は、この幸せを  
味わおう。

口に運ぶ料理を堪能しながら。目の前の少女の笑顔を見ながら。この  
幸せを……

「いただきます」

「いただきます」

## 第8話（後書き）

あれ？この終わり方って最終回のような……

ま、ありえませんか。せめてAsは完結させます。

ともあれ、第8話です。次からは原作に入ります。ヴォルケンリッターが悠也に対してどんな反応を見せるのか。また、それに対して悠也がどう対応するのか。

誤字脱字があれば、指摘してください。

## 第9話（前書き）

クーラーが壊れて水が出てくる。  
しかも、その水がパソコンに直撃しましたorz

## 第9話

悠也とはやては、まるで恋人の様にピッタリと体を合わせてベッドに横たわっていた。

元々、はやてが眠るベッドは広いのだ。それも、悠也とはやてが二人で眠っても余裕はあるくらいに。だけど今日は悠也の隣で夢の世界に、今にも陥りそうなのはやてが言ったのだ。

「今日だけは、こうやって一緒に寝よ？」

と。勿論、悠也はやりわりと断つたのだが次第に泣き顔に変わっていったのはやてに落とされた。所謂、泣き落としだ。

『ご主人様も、そろそろお眠りになってください。明日はハイキングに行くのでしょっ？』

『そうだな。そろそろ時間もいい頃だし。』

枕元にある目覚まし時計を見ると、もう少しで0時だ。手を少しだけ動かして、はやての頭に触る。サラサラとした髪は撫でていると気持ちがいい。笑い、というよりも幸せな笑いが顔に出る。それは、はやての直ぐ横に置いてあるネックレスだ。プレゼントした時など、見ている気が抜ける程にはやては笑っていた。選んだ甲斐があると、いうものだ。

「おやすみ」

『おやすみなさい』

「う……」

少し寒いのだろうか。はやてにタオルケットを深めに被せて、悠也は瞼を閉じた。

トクン、トクン、トクン。すぐ隣で寝ているはやての心臓の音が、まるで子供をあやす様なリズムで鳴っている。心地いいと感じるソレは、悠也を眠りへと誘っていく。

だが、その心地いいリズムは一瞬で崩れた。

それはまるで、マラソンのランナーが走った時の様な暴力的までのリズム。

直ぐにはやてを抱き上げるが、荒い息遣いに加えて体温が急激に上がり始めた。

「はやて！」

「……じゅう」



「バリアジャケット展開」

「アカレラ!？」

「後ろです!!」

バリアジャケットを展開された事に驚く暇もないまま後ろを振り向くと、本が浮いていた。

文字通り、本が浮いているのだ。あの本は、はやてが昔から家にあつたと言つて大事にしていた本だ。

「封印を解除します」

その本には、力づくでも外れない鎖が巻かれていた。だが、その鎖は塵も残らずに弾け飛んだ。そして何もしていないのにも関わらずページがめくられていく。

その時、はやての体が震えた。

「起動」

「デバイス!？」

「ご主人様！はやて嬢が！？」

はやての胸から、白い球体が出ていた。魔法を使う悠也が見間違える物ではなく、それはリンカーコアだった。リンカーコアは、悠也が手を伸ばすも届かずに本へと向かう。そして、本の中に入った。

瞬間、はやての部屋は光に包まれ、光が収まると、そこには四人の人が片膝をついていた。

まるで主人の命令を待つかのような、騎士の礼儀作法に見えた。

「闇の書の起動確認しました」

桃色の髪をポニーテールにした女性

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士でございます」

金髪の髪を肩あたりまで伸ばした女性

「夜天の主の元に集いし雲」

犬の耳と尻尾を付けた白髪の男性

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

最後に赤い髪を三つ編みで二つにわけた小さい女の子

『……アカレラ』

『なんででしょうか。』

『今からはやてに回復魔法かけるから補助して』

腕の中のはやては気絶していた。息遣いと高い体温は収まりつつもあるが、普通よりも高かった。はやてを乱れたベッドに寝かせなおしてタオルケットをかけた。

『畏まりました。』

「ふっ！」

三角形の魔法陣は、直径が二メートルほどの大きさだ。悠也が発動した魔法陣から薄い膜が悠也とはやてを包みこむ。ちょうど、床か

ら半円形だ。

「……主？」

声は桃色の髪の女性、シグナムからだ。騎士らしく、主の許可なく頭を上げていない。

だが、赤毛の女の子、ヴィータはそわそわして今にも顔を上げそう  
だ。

「一つ質問してもいいかな？ ああ、顔は上げちゃだめだよ」

またピクリと動いたヴィータに苦笑いしながらも、悠也は動揺を上手く隠せていた。

当たり前だろう。いくら悠也が魔法を知っているからと言っても、本が勝手に浮かんでそこから三人の人間に加えて守護獣が召喚されたのだ。それに、この四人が言っている「主」は十中八九、悠也ではなくベッドで気絶……眠っているはやてだ。そう確認しているものの、それを言っていないのは状況が状況だからだ。

見た所、守護獣は体にピッタリとくっついているアンダーシャツは惜しげもなく筋肉を見せびらかせている。日に焼けた四肢も鍛え上げられている。

これだけでも、既に悠也にとっては脅威になっているのだ。この四人が召喚された時に展開されていたのはベルカ式の魔法陣だ。ベルカ式は、たとえばバイスを持っていなくとも体に直接魔力を流し込んで強化することが出来る。この四人が使う魔法は、恐らくベルカ式の魔法。

はやてがいる状況で、戦う事なんてもつての他。悠也の能力を使えば逃げる事が出来るが、はやてが「主」なら逃げる事なんて不可能だ。リンカーコアを通して繋がっている筈だ。

「えーっと、君たちは騎士なんだよね？」

「はい、我らはベルカの守護騎士です。」

「じゃあ、武器を持っていない人にいきなり襲い掛かったりなんてしない？」

「当たり前です。」

「騎士として誓ってくれる？」

「レヴァンティンに誓います」

「グラーファイゼンに誓います」

「クラールヴィントに誓います」

「主を守る盾に誓います」

「じゃあ、顔を上げて」

緊張が走る。さっきの言葉が嘘なら、悠也はどうなるかわからない。だが、良くないことが起こるのは確実だろう。騎士ならば、本当の騎士ならばさっきの言葉は守ってくれる。そう信じ、顔を上げる四人を慎重に見た。

「主………じゃない!？」

「テメエ!」

「主はそっちの女の子!」

悠也を見た三人は、身構えたが守護獣の手に遮られた。

「どっつして止める!？」

「そっだぜフィーラ!なんで止めやがる!」

「あの男が主の命を握っているのよ!？」

だが、ザフィーラは悠也と目を合わせたまま微動だにしない。悠也もまた、視線を外すことは無かった。

「我ら守護騎士は誓ったのだ。武器を持たぬ相手には手を出さないと、己の誇りに」

それを聞いてシグナムとヴィータは腰を落とした。だが、何時でも動ける状態だ。

シヤマルは何やらベッドで眠っているはやてをじっと見ている。

「……ベルカの騎士に聞きたい。主はどうしたのだ？」

「いきなり気絶した」

座っていた二人は目を見開き、悠也を睨んだ。が、行動には出ないいや、出れないの方が正しい。例え知らず知らずの内にも誓ってしまったのだ。襲い掛かれるわけがない。

「ベルカの騎士さん。そっちに行って主をみてもいいですか？」

「どうして?」

「私は治療魔法が使えます。恐らく、貴方よりも使えるでしょう」

「さっきの誓いが守れるなら」

「誓います」

「シャマル!」

即答したシャマルに声を荒げたのはヴィータだ。隣に座っているシグナムは何故か目を瞑って瞑想している。

「大丈夫よヴィータ。だけど、その前に私からも要求があります。バリアジャケットを解除してください」

シャマルの言う事はもつともだった。自分たちは武器もバリアジャケットも展開していないものにも拘わらず、相手はバリアジャケットを展開していて武器もすぐに手に取れる状態じゃ、誓いもへったくれもない。



「アカレラ」

「しかし……」

「彼女が言っていることは正しい」

「畏まりました」

静かにバリアジャケットは解除され、ジャージにTシャツ姿のラフな恰好になった。

そして悠也は発動していた治療魔法を止め、シャマルに場所を譲った。

場所を譲った悠也は、そのまま部屋を出て行こうとしたが当然の如く呼び止められた。

「待て、どこに行くんだ？」

「あんまり動くな」

「そうは言っても、はやて。あゝ、お前たちの主の服がビシヨビシヨで、このままじゃ風邪ひくぞ？」

これでもか！と言つほど悠也を睨んでいた目が揺らぎ、少し弱くなつたものの睨む。

「では、俺がついて行く。シグナムとヴィータはこのまま主の傍に」

部屋を出ると、ザフィーラが遅れて出てきた。監視のためと、もしもの為だろう。

悠也も、アカレラに頼んでザフィーラと部屋に残っている三人を監視してもらっている。

流石に、はやての事を「主」と呼んでいようが信用なんて出来ない。それはヴォルケンリッターも同じことだ。気絶した「主」を治療して、バリアジャケットを解除していても信用何てもつてのほか。それどころか、悠也はベルカ式魔法を使ってデバイスが在ろうが無からうが体を強化して戦えるのだから。

リビングに入ると、シオンが足にすり寄ってきた。ごめんな、と一言。抱き上げて、テーブルの下に置いてあつたバッグに入れて鍵をかけた。シオンにかまつてられないのである。

ザフィーラが悠也を注意深く監視している中、悠也はパジャマを選ぶ。なかなかシユールだ。男が女物のパジャマを選んで、その後ろから鍛え上げられた体の獣耳の男が監視する。やっぱりシユール。

パジャマを選んだ悠也は、次に洗面器にお湯を溜めて清潔なタオルも準備した。汗で濡れたまま新しい服を着れば、気持ち悪いのは至

極当然の事。幸いにも、部屋には女性がいる。彼女たちに任せよう。そうして、部屋に戻ろうとした時だった。二階から悲鳴が聞こえたのだ。

「アカレラ！」

「あつ、お待ちくだ  
」

アカレラが何かを言い終わる前にジャンプする。頭の中に思い浮かべているのは、はやての部屋。一瞬で悠也の見ていた風景。ザフィーラの驚く顔。は消えて、次に目にしたのはシグナムとヴィータ、それにシャマルがはやてに指を指されて目を見開いている状態だった。

「あ、悠也……」

はやてが何かを言う前に、ザフィーラが扉を蹴り破る勢いで部屋に入ってきた音で遮られた。それに驚いたはやてがまた声を上げて、ヴォルケンリッターはわたわたと慌てる。今度はカオスだ。

「なんなんこれ？」

慌てているヴォルケンリッターを睨む悠也を見て、はやては当然の事を口にした。

## 第9話（後書き）

どうでしたか？

ヴォルケンリッター出てきました。そして悠也と戦闘はありませんでしたが、対峙しました。

悠也からすれば、いきなり召喚魔法で現れた不審な守護獣と女性という解釈です。

ですが、ヴォルケンリッター側からすれば主と勘違いしたが主の傍にいる正体不明のベルカの魔法を使う男。または騎士、っていう解釈になると思います。

はやてに関しては、原作でもあった通りに気絶してもらいました。独自の解釈なのですが、いきなり闇の書が起動してヴォルケンリッターも召喚してしまった反動から気絶。と言う事にしています。

感想があれば書いてください。私が幸せになれますw

## 主人公（前書き）

ここで主人公を紹介します。

## 主人公

神崎悠也

(かんざきゆうや)

現在14歳の中学二年生。身長は166cmで、成長期。容姿はこれといって特筆している所は無いが、年齢に似合わない落ち着きがクールだ。

生まれて自分を取り戻したのが5歳。丁度そのころに両親を失い、後見人には高町夫妻がなっている。その為か、よく翠屋に足を運んで珈琲を楽しんでいる。

転生者である。

魔導師ランクはAAと、少し見劣りするかもしれないが十分に戦えるレベル。魔力光は黒。使う術式は古代ベルカ式。

インテリジェンスデバイスのアカレラを相棒としている。

待機モードは十字架のネックレスで、ちょうど交わっている場所にある深い青色の宝石がコア。





## 主人公（後書き）

一応、主人公紹介です。

スペックはそこそこですが、これでいいと思います。  
かえって強くしすぎると、魔力タンクになりかねないのでこっしま  
した。

ですが、悠也のレアスキルかな？それを使えば広域殲滅魔法だろう  
が、追尾してくるスフィアだろうが関係なく避けれるので強いです。

## 第10話(前書き)

今回、かなりの独自解釈が入っております。

それでも読んでくれるという方は、どうぞ読んでください。

## 第10話

煙草に火を点けて、悠也はテラスに置いてある椅子に腰を掛けた。昨日の夜、正確には今日なのだが、ヴォルケンリッターが召喚されてから八時間が過ぎた。

本来なら、もう朝ごはんを食べて出かけている時間だ。だが、はやてが時間通りに起きなかったのだ。シャマルが見た所、魔力の急激な減少が原因とのことだ。

はやてを「主」と呼んでいることから解るだろうが、ヴォルケンリッターが仕える主人は八神はやてだ。

何故はやての部屋に闇の書があったかは不明。悠也でさえ気づくことが出来なかったのだ。

「はぁ……」

「ご主人様、そう気を落とさないでください」

アカレラが慰めてくれるが、何の解決にもならない。昨日の夜から向けられている視線も解決にもならないし、それが気になって眠れなくて寝不足という事実も解決にならない。

コーヒも5杯飲んでしまった。おかげで胃が心配だ。

「時間は？」

「午前9時です」

「まだ起きないのか……はあ」

「騎士を納得させるには主が説明するのが一番ですからね」

そう、そうなのだ。騎士を納得させるには主の説明が一番いいのだが、その主が爆睡してはとうしようもない。気絶から目覚めたはやては、悠也を見ると「なんや、夢か？」と言って再び寝てしまったのだ。それから約9時間。一向に起きない。

そこから監視が始まったのだ。小さな赤毛の女の子、ヴィータと金髪の女性シャマルはそのまま部屋に残り桃色の髪の女性シグナムは部屋の入り口で仁王立ち。

獣耳の男ザフィーラは悠也の監視と、眠る主を守護する騎士と部屋への入り口を塞ぐ騎士。

そして不審な男を監視する騎士。

「はあ……」

短くなった煙草を捨てて2本目の煙草に火を点ける。後ろに向けて火の点いていない煙草を差し出すが、暫くたっても何も起きない。ワザとらしく肩を竦めて煙草を箱に戻す。

「なぜお前は警戒をといたのだ？」

「なぜって、そりゃ最初は警戒してたよ」

いきなり出てきたヴォルケンリッターを警戒するのは当たり前のこと。だけど、1時間、2時間、3時間と時間が経過していく内に警戒することがバカらしくなった。

「けどな、そっちは何もしてこないし、はやてからは離れない。守ってるって言った方が合ってる様な感じもする」

「当たり前だ。我らヴォルケンリッターは主を守る守護騎士だ」

そして一番の理由が悠也を監視しているザフィーラが言ったこれ。主を守る守護騎士。

騎士とは、約束を守るもの……だそうだ。

「それに、誓ったのだ。我らは武器の持たない者とは危害を加えてはいけないと誓ったのだからな」

「……そうか」

煙が風に乗って消えてゆく。空はこれでもかというくらい青々とし  
ていて、正にお出かけ日和だ。煙を吐いて、悠也は立ち上がった。  
そして短くなつた煙草をテラスに備え付けてある灰皿に押し付けた。

「さて、朝ごはんでも作るか」

「は？」

ザフィーラは監視対象である悠也の言葉の意味が理解できなかった  
のか、少しだけ呆けて直ぐに部屋に戻つた悠也の後を追つた。

結局、はやてが目を覚ましたのは十二時を少し過ぎてからだつた。  
そして、悠也の予想通り大声で悠也の名前を呼んで「説明して!？」  
と慌てふためいていたが、取り敢えず落ち着いてもらった。だが、  
それから十分もしない内に耐え切れなくなってしまったのかりビン  
グに一度、悠也とはやて。そしてヴォルケンリッターが集合してい

た。

椅子に座る悠也とはやてとは違い、ヴォルケンリッターは揃って片膝を床に着けて頭を垂れていた。

「な、なあ悠也」

「ん？」

「この人たち誰なん？」

はやての質問は当たり前のものだ。悠也が説明しようとして口を開ける前にシグナムが口を開いた。

「烈火の将 剣の騎士シグナム」

「紅の鉄騎 鉄槌の騎士ヴィータ」

「風の癒し手 湖の騎士シヤマル」

「蒼き狼 盾の守護獣ザフィーラ」

そして四人は口を揃えて言い放つ。

「我らヴォルケンリッター。主の命にだけ従い、主を脅かす存在を打消し、主を守る守護騎士でございます。なんなりとご命令を」

そう言つて、四人は「主」の返事を待つが、一向に返事が返つてこない。

それもそうだろう。いきなり見ず知らずの四人が自分を「主」と呼んで、自分たちの事はどう扱つてもいいと言っているのだから。もしこれが自分に向けて言われているとしよう。

当然、混乱する。それは、はやても同じこと。

横に座る悠也とヴォルケンリッターを交互に見て、目を大きく開いた。

「ええつと、ええつと？」

「はあ、だから言つたんだザフィーラ。こうなるって」

こう、何度もこの状況になると言っていたがザフィーラは聞かず今だ。

「本当に簡単に言つぞ？」



「うん」

「あゝ、本当に簡単に言うと、この四人。今日から八神家の一員」

簡単に言った。これでもかかってくらい簡単に。幼稚園児にでも理解できるくらい簡単に。けど、はやてはその言葉をゆっくりと理解する。

「ほんま!?!」

「ほんと、聞いてみなよ。」

悠也はそう言うと立ち上がり、シオンの入っているお出かけ用のバッグを肩にかけて出て行った。そろそろシオンが心配になってきたのだ。

それはさておき。今、家にはヴォルケンリッターが片膝を着いて九歳の女の子に頭を下げている。言い方を変えれば、子供に大人が頭を下げている。もっと言えば、獣耳の筋肉モリモリの男が九歳の女の子に頭を下げている。

シユール

「あ、頭上げて」

騎士たちは、少し戸惑いがちなながらも頭を上げた。こうしてちゃんと「主」を見るのは初めてなのだ。

「なあ、なんでそんな膝何て着いてるん？って言うか服は？」

「あ、えっと。まず、膝を着いているのは……そうですね、貴方が我ら守護騎士の主だからです。そして、服に関してですがこれが元から着ていた服なのです」

聞かれた事に正確に答えるシグナムに、はやては椅子に座ってと言い四人は座った。

この様な扱いに、守護騎士達は戸惑いを隠せない。

「それで、悠也から聞いたんやけど家族ってほんまなん？」

目を輝かせて話すはやてに、やはり四人は戸惑いを隠せずに行っている。が、シャマルが口を開いた。

「その事でお話があります主はやて。最初に、私たちは人間ではあ

りません」

「え？でも、どこからどう見ても」

そう言いながら移動して、シグナムの腕に触れる。確かに暖かく、鍛え上げられてはいるが女性特有の柔らかさはある。

「確かに、私たちには触れることができます。」

はやての手をそつと握り、シグナムも主の暖かさを知る。

「ですが、私たちは闇の書と呼ばれる本のプログラムなのです。基本構造は人間と殆ど変りはありませんが、もし怪我をしたとしても魔力さえ主から頂ければ直ぐにでも治ってしまいます」

「でも、ちゃんと温かい。触れることだって出来るし、こつやつてシグナムもワタシのこと触れるやる？」

シグナムの隣に座るヴィータにも手を伸ばす。そして、浮遊魔法で自分の膝の上に運ぶ。

急に魔法をかけられたヴィータはギョツと目を瞑る。ザフィーラは、ただ目を細め、シヤマルは心配そうにヴィータを見ている。

「ほら、ちゃんとヴィータにも触ることだって出来る。だから、人間じゃないなんて言わんといて？」

「……はい。主がそう言うのなら」

「その主って言うのもアカン。私は八神はやて」

ギョツと目を瞑っていたヴィータは、恐る恐る目を開ける。が、視界に入ったのは優しい笑顔を見せてくれる新たな主。

「は、はやて？」

「うん。そうや。ほら、シグナムも」

「あ、主はやて」

「シヤマルも」

「はやて、ちゃん」

「ザフィーラも」

「主」

「ザフィーラも」

「は、はや……主」

流石に「主」の事を名前で、しかも呼び捨てで呼ぶなど騎士として、  
なにより自身が許さない。が、目の前の「主」はどうだ。と言うよ  
りも、主に加えてシグナム、ヴィータ、シャマルが「主」の事を名  
前で呼ばなければダメ。そういう空気になっている。

「ザフィーラ」

「はい、はやて」

「うんうん!!」

ニコニコと笑う新たな主に、戸惑いながらも喜びを隠せない。それ  
もそのはずだ。

闇の書には、まだプログラムが存在する。その一つが転生プログラ

ム。

それは、「主」が死ねば次の「主」になるべき人間の元へ転移するプログラムのことだ。

ヴィータが目を瞑っていたことも、これが原因だ。

歴代の「主」が全て普通の人間ではなかったのだ。確かに、はやての様に優しい主もいる。

だが、はやてを光とすれば当然、闇もある。

守護騎士を、只の道具としか扱っていない「主」もいれば、彼女たちを犯したりもする。

拷問をする「主」もいる。殺戮兵器の様な扱いもする。

何度も転生する闇の書だが、記憶は勿論ある。だが、薄れゆく記憶の中で鮮烈に覚えているとすれば、そう酷いことなのだ。楽しい記憶は苦しい記憶に埋められる。

はやてがヴィータに浮遊魔法をかけた時、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの脳裏に浮かんだのはそういった記憶だ。

だが、実際は優しく撫でられて視界には優しい表情をした「主」の顔。思わず呆けてしまったのは言うまでもない。

「主はやて、一つ聞いてもいいですか？」

「ええよシグナム」

「主はやての傍にいた騎士は、何者なのですか？」

これは、シグナムたちが「主」の次に気になっていたことだ。魔力リンクはそう多くないが、あの余裕のある表情に守護騎士の誰もが見えない程の高速移動。警戒するのは当たり前のことだ。

「騎士……あ、悠也？」

「はい。その悠也という騎士とは、どっという関係なのですか？」

「せやな、うん……」

こう、改まって聞かれると悠也とはやての関係はどの様な関係なのだろうか。

兄妹ではないし、ましてや恋人でも家族でもない。只、言ってしまうえば友達のような関係なのだろうか？

「多分、友達って言うか幼馴染っていうか。まあ、けど悠也の事は好きや」

これは恋愛感情じゃない。九歳のはやてからすれば、likeのほうなのだ。決してloveじゃない。はやてから悠也の事を聞いたザフィーラとシグナムは顔を引き攣らせている。

そうだ、シグナムとザフィーラは悠也の言う事に耳も傾けずに敵意

だけを晒しだしていたのだ。

「もしかして、なんかしたん？」

「……はい、主はやてに害のある存在かと思ってしまい」

「私も、害ある存在かと思い監視していました」

シユン、と肩と獣耳を落とす二人にはやては屈託のない笑みを向けた。

「なら、明日は謝らなあかな。あ、皆の服も買いに行かなあかな。どないしょ」

一人、思考の中に入ったはやては、ヴィータの事を忘れており十分に再起動したはやてにどかさされるまで、まるで置物の様に黙って座り続けていた。



## 第10話（後書き）

原作？では恐らくなかったではないかというシーンを作ってみました。どうでしたか？

まあ、独自解釈が多い事は分かっています。ですが、こうなるんじゃないだろうか？という感じに書いてみました。

ところで、ザフィーラの一人称は私でいいのでしょうか？  
シグナムは私。シャマルも私。ヴィータはワタシ。

誰が喋ってるかわからなくなってきましたそうです><

第11話(前書き)

どうしてこうなったんだろ？

## 第11話

シグナムたちが、はやての家族になって数週間が過ぎたある日の事。封鎖結界の中で、悠也はアカレラを振って伸びてくる蛇剣を弾き落としていた。

どうしてこうなった。そう心の中で呟き、迫る銀の煌きをジャンプして避け今朝のことを思い出していた。

「ほら、悠也にも用意したで！」

元気に言って、はやてが取り出したのは画用紙に描かれた悠也だった。

九歳が描くには上手いと言えるそれは、確かに悠也が描かれているのだが恰好が普通とはかけ離れているものだ。

「こんなのどうしたんだ？」

「ほら、シグナム達には鎧？っていうの作ってあげたけど、悠也には何もなかったやん？だから、作ってみてん」

ニコニコ笑って悠也が描かれた画用紙をテーブルの上に置いた。

改めてそれを見てみると、今まで悠也が使っていたバリアジャケツトとは違い、騎士の様だった。今まで悠也が使っていたのはピッチリとしたインナーに、幾重にもベルトが巻かれたズボン。そして、全身を覆うローブだった。

だが、画用紙に描かれているのは全然違った。

幾重にも巻かれたズボンには、膝上まで鎧が付け加えられている。腕には肘上までガントレットが、そして胸から胴にかけては軽鎧がそれぞれ銀で統一されているが、他は全て黒だ。最後に、ローブの名残と言っていい外套が腰から踵まで着けられていた。

「結構カッコイイな」

「せやろ。図書館行ってきて考えたんや！」

「ぱあ、と花が咲くように表情が笑顔に変わる。こんな笑顔を見せられれば、見せなければならぬ。テーブルに置いてあった新しいバ

リアジャケットが描かれた絵を見て、空中にディスプレイを展開した。

「アカレラ、現在のバリアジャケットは残しておいてくれるか？」

「勿論でございます。では、新たなバリアジャケットの登録をしますので、そのまま待っていてください」

空中に展開されているディスプレイに、今まで使っていたバリアジャケットが浮かび上がる。ズボンやインナーはそのままに新しいモノが加えられる。

ガントレット、膝上から爪先まである足鎧。そして胸から胴にかけての軽鎧。

数十分の時間を置いてディスプレイには、はやてがデザインした騎士甲冑が完全に再現されていた。

「よし、じゃあ庭に移動しようか」

「うん」

はやての乗る車いすを移動させてテラスに出ると、シグナムが剣を振っていた。

ザフィーラは狼の姿になって日向ぼっこをしていた。昨日は、はやてとヴィータもザフィーラに交じって日向ぼっこしていた。出会っ

てから短い間、シグナム達とは誤解も解けて仲良くなっている。特にザフィーラとは喫煙仲間という形でなかなか仲がいい。ヴィータともだ。勿論、ヴィータが煙草も吸う筈もなく新しい妹が出来た感じだ。

「主はやて、騎士悠也。どうしたのですか？」

「悠也の新しい騎士服のお披露目や」

「ほお、騎士悠也の甲冑ですか」

騎士悠也、とは勿論悠也のことだ。これは悠也が強制したことではないのは確かなのだ。気づけばシグナムがそう呼んでいたのだ。理由を聞いてみれば「貴方は主はやてを幼い頃から守ってくれたのだ。それを騎士と言わず何と言えがいい？」と逆に悠也に問いかけってくる。ザフィーラも最初は騎士悠也と呼んでいたのだが、頼みに頼み込んで普通に名前で呼んでもらえた。だが、シグナムは変える気がないらしく諦めるしかなかった。

「んじゃ、やりますか。封鎖結界」

縦に長い封鎖結界が展開される。

「主はやて、少し離れましょう」

「どんななるかなあ〜」

少し離れた位置にはやてとシグナムが立ち、悠也は庭の真ん中に立った。

「アカレラ」

「起動キーはどうしますか？」

「ちょっとだけ変えよう」

首にかけている十字架をモチーフにしたネックレスを右手で握りしめ、胸の前に持ってきた。緊張はない。目を瞑り、イメージする。魔法で大事なものはイメージだ。

「我が望みは一振りの剣<sup>ウツ</sup>。全てを切り伏せ、全てを守り、全てを救う剣。新たな力をこの手に！アカレラ、セットアップ！！」

「畏まりました」

瞬間、悠也が光に包まれる。そして、光が収まると新しいバリアジヤケットに身を包んだ悠也がいた。それは、はやてが描いていた通りの恰好。騎士と言うのに相応しい騎士甲冑。時代が違えば主に用意してもらった騎士甲冑を着こんだ本物の騎士に見えるだろう。

それくらい、はやてが描いた騎士服は悠也に似合っていた。

悠也は、シグナムのレヴァンティンによく似た剣アカレラを振う。上から下に。その勢いを生かして、下から上への切り上げ。そして剣を水平にして音速をもって横に薙ぎ払う。

「うわ、かっこいいな」

「……………」

それはまるで、剣舞だった。悠也本人は新しいバリアジヤケットの確認だったが、まだ九歳のはやてには綺麗に見えていたのだ。だが、シグナムには違う様に見ていた。

「主はやて、私も剣を振っていいですか？」



「ほえ？」

「ありがとうございます」

「え、ええっ!？」

返事を聞く前に、既にバリアジャケットを展開してシグナムは飛び出していた。

それは、騎士として悠也と戦いたいから。それと、主が悠也のことを褒めるから。

少しの嫉妬心を孕んだシグナムは、自身の血が滾るのを隠そうともせずに悠也の眼前に立った。

「騎士悠也。新しいバリアジャケットを慣らしたいとは思わんか？」

「いや、別に自分でやっても」

「ヴォルケンリッターが将 烈火の騎士シグナム。参るッ！」

「話くらい聞けよっ!？」

こうしてシグナムと悠也は模擬戦を開始した。

「レヴァンティン！」

「Ja！」

レヴァンティンが悠也を狙って振り下ろされる。が、悠也は紙一重でそれを躲す。  
そしてアカレラがシグナムに襲い掛かるが、シグナムもレヴァンティンで防ぐ。

「落ち着けシグナム！」

「私は、落ち着いて、いるっ！」

話している内にも斬りかかるシグナムに、悠也は後ろに飛んで距離

を取った。

いきなり斬りかかってくる奴が落ち着いている筈がない。ない筈なのだが、シグナムの剣は迷いを知らない。確実に悠也を殺しにかかってきているのだ。いくら非殺傷設定であろうとも、怪我はするし気絶もする。純粋な魔法ダメージ、砲撃ならまだしも実態のある剣で斬られれば斬られるのだ。

「どうした騎士悠也。貴方の剣ならば私を仕留めることが出来るだろう」

「いきなりどうした？」

眼前に剣を構えながらシグナムを睨みつけるが、本人はどこ吹く風と再び踏み込んだ。

シグナムはレヴァンティン振う。それはプログラムされてか、全てが必殺の一撃になる。

振う振う振う。防ぐ防ぐ防ぐ。

攻めるシグナムに、悠也は剣で受け、逸らし、紙一重で避ける。

「クソッ！」

悠也は埒が明かないと、シグナムの間合いに踏み込んだ。勿論、それは悠也も同じだ。

そこに必殺の一撃が振るわれる。が、悠也は何の前触れもなく消えた。

「なっ!?!」

「気絶でもしとけ」

消えた悠也はシグナムの後ろに現れ、首をキュッと絞めていた。意識を失ったシグナムを支え、近くにきていたザフィーラに預けバリアジャケットを解いた。そして、胸ポケットから煙草を取り出してジッポで火を点けた。

「これはお仕置きかな?」

心配そうにシグナムを見るはやてを見て、悠也は煙を吐き出した。

## 第11話（後書き）

次はシグナム視点です。

どうしてシグナムが悠也に襲いかかったかが分かります。

- - - - -

IF

「うわ、かつこいいな」

「くっ、私も褒められたい！」

「シグナムは二ト侍やから褒めへんで？」

「そんな！？こうなれば、騎士悠也を打ち取り主に献上しなければ  
！」

こんなIF展開w

## 第12話(前書き)

11話と12話がグダグダですねW

## 第12話

騎士悠也が剣を振った。既に音速の域に達しているだろうその一太刀は、見る者を魅了する何かがあった。だが、それは自身の獲物を握ったこともない素人が魅了されるものだ。

あの一振りには、確かに才能があるからこその一振りなのだろう。しかし、決して才能があったとは言えない剣捌き。一流になれないなら、努力して、努力して、やっと届いた領域に悠也はいるのだ。それにシグナムは戦慄を隠せなかった。最初に出会った頃から、悠也から血の匂いがした。

それは騎士としての本能か、戦士としての本能か。警戒せざるを得なかった。

最初から悠也は主はやてに近しい存在である事は解っていたのだ。解っていたのだが、我らヴォルケンリッターは警戒した。

「うわ、かつこいいな」

「……………」

そして、その警戒はここにきて敵性にかわった。騎士悠也がバリアジャケットと剣を展開した途端、騎士として、主を守る守護騎士として、今の悠也は危険すぎた。

まだ十四歳という年齢ながら、アレは戦場に立ったことのある人間

だ。

「主はやて、私も剣を振っていいですか？」

普段ならこんな行動は取らない

「ほえ？」

主はやての返事を聞く前に

「ありがとうございます」

私は悠也に向かってレヴァンティンを振り下ろしていた。

「え、ええっ!？」



十合、二十合と剣を重ねることに、悠也の本質が少しだけ見えた気がした。

確かに剣を振り、防がれることに増してゆく血の香り。戦場に立っているかの様に錯覚してしまう。が、騎士悠也は一向に打ち込んでこない。それどころか、私の剣筋を完全に見切って紙一重で避け続けている。

「レヴァンティン！」

「Ja！」

カートリッジをロードして、魔力をブーストさせる。

「落ち着けシグナム！」

そして、騎士悠也の間合いに入った。とは言え間合いと言えば私と同じこと。魔力を放出させたままレヴァンティンを振り下ろす。切り上げ、袈裟斬り。

「私は、落ち着いて、いるっ！」

が、もの見事に防がれた。なら、挑発でもしてみようか？

「どうした騎士悠也。貴方の剣ならば私を仕留めることが出来るだろっ」

「いきなりどうした？」

だが、帰ってきた返事は私が満足できるものではなかった。体中の魔力を高める。そうする事でもともと自分の体にかけていた強化の魔法に重ねて強化の魔法を使う。スピード、パワー。この二つが上昇したのだ。さあ、どうくる？私を殺すか？

「クソッ！」

騎士悠也は間合いに踏み込んできた。いままで防御に徹してきた悠也が、だ。

レヴァンティンを振り下ろす。それに対して騎士悠也は、剣の切っ先を下に向けていた。

どう足掻いても私の方が早い。

獲った！

振り下ろしたレヴァンティンは空を斬った。

「なっ!？」

バカな。あのタイミングで躲せる筈がない。転移にしても魔力が全く感じられなかったし魔法陣も無かった。なら、高速で移動した?ありえない。歴戦の騎士である私が目の前に、それも間合いに入っていた相手を見失う訳がない。

「気絶でもしとけ」

その言葉を聞いた時には、既に首に手が回っており絞められていた。動脈と静脈の部分に力を入れられ、目の前が真っ暗になる。例えばプログラムであるこの体でも、構成は人間と何ら変わらない。そこへ脳への一時的でも、急激な血液の不足。

ああ、私の負けか……

体の感覚が消え、シグナムは完全に気絶した。



## 第12話（後書き）

シグナムが感じたのは、恐怖に近いものです。悠也から血の臭いがする。剣を重ねることに血の臭いが強くなっていく。

これは悠也の過去の話になりますが、書くのはもう少し後です。

はやてとシグナム達は悠也のレアスキルを知りません。ですから、悠也が高速で移動したと思っ込んでいます。

自分を強化する魔法は魔法陣や、自分を覆う魔力が見えます。が、悠也にはそれが無かった為です。

シグナムが原作で「鎧」と呼んでいたものがそうです。魔力で自分を覆いフェイトが放った魔法を防いでいました。

すみません。次からはもう少し長くて、ちゃんとしたものを書きたいと思っています。

第13話(前書き)

今回はギャグかな？

### 第13話

現在、悠也とザフィーラ（狼）に乗っかっているはやてとシャマルは目の前で床に視線を落としているシグナムと向かい合う様に座っていた。

レヴァンティンは、はやての手の中だ。こうなっている理由はシグナムが新しいバリアジャケットを展開したばかりの悠也に襲い掛かったからだ。怪我は無かったものの、下手すれば死んでいたかもしれないのだ。まあ、はやては知らないがシャマルは理解している。現に、私は怒っていますと言わんばかりにシグナムを睨んでいる。流石のシグナムと言えど、ヴォルケンリッターの参謀には敵わないのだろう。

強さが、じゃなく別の“強さ”が、だ。

「さあ、シグナム」

ニヤリと笑うはやてに、ビクッと肩を震わせたシグナム。

「は、はい」

「お仕置きの間や」

「うっ、主はやてがそう言うなら」

シグナムにしては珍しくビクビクしながら立ち上がり、レヴァンテインを受け取った。  
そしてシャマルはどこからとなくカメラを構え、はやての様にニヤリと笑う。

「あ、主はやて、本当にやるのですか？」

「せやで？」

「し、しかし！」

「お前も諦めが悪い。騎士としては主の言う事は絶対だ」

「ザフィーラ！」

「そうよシグナム。騎士は主の言う事に絶対服従なんだから」

「シャマル！？」

三人に抗議するもニヤニヤと笑いながら諦めろと言われ、少し涙目になりながらも悠也を見た。その目は、まるで捨てられてしまう仔



犬の様で騎士がするようなものではなかった。そこでカシャと音が鳴った。いつの間にか携帯を取り出していた悠也が写真を撮ったのだ。そこでシグナムは気づいた。この戦場に私の味方はいない、と。

「はやて、シグナムのお仕置きどうする？」

「せやな〜……」

悠也がシグナムに襲い掛かれてから一日が過ぎた朝。朝食を終えた悠也はコーヒー片手に

テーブルに座っていた。もはや学校はどうした？と聞かない。家には、悠也とはやてとザフィーラしかない。ウィータはご老人方に誘われてアイゼンを担いでゲートボールに行き、シャマルはどこかに出かけ、シグナムは道場に行っている。

何も知らないシグナムは、昼前には帰ってくる筈だ。

「レヴァンティンでも取り上げるか？」

「うん。それは騎士やからちょっとなあ」

「じゃあ、はやてみたいにお尻ぺんぺん……は変態か」

勿論やったことはない。断じてない。年齢的にはまだいけるかもしれないが、ない。ヴィータも見た目が子供だからいけるのかもしれないが、実際の年齢は悠也よりも年上だ。

「お尻ぺんぺんで、アカンで？」

「わかってるよ。それにしても……なあ」

悶々と考えていると、ザフィーラが渋い声でとんでもないことを言い出した。

「昔、シグナムがメイド服を着ていたことがある」

「「それだあ！」」

早速はやては画用紙を持ってきて、メイド服を描きだした。何も、服を買ってくるというわけでもないのだ。デバイスがあればバリアジャケットとして着れるのだ。

そして数十分後、はやてと悠也は互いに描いたメイド服を見せあった。

はやてが描いたメイド服は本に載っているメイド服……ではなく、スカート丈が異様に短く胸元と背中が大きく開いた絵だった。悠也が描いたのは基本的に忠実なメイド服で、違うと言えば猫耳に猫の尻尾だ。

見せ合った後、目を合わせた二人は二枚の絵を重ね合体させた。完成したのは猫耳でスカート丈が異様に短く胸元と背中が大きく開いたモノだった。もはや原型が全く留めていない。

「これをシグナムが……ぷっ」

「想像しただけで笑いが」

「……クッ」

これを着ているシグナムを想像するとザフィーラでさえ笑ってしま  
う始末。

そしてリミッターと言うものが外れた悠也が画用紙を取り次に描い

たものは……

「スク水!？」

「悠也……流石にこれは」

「お仕置きだぜ? なんでもできるんだぜ? 言ったら勝ちなんだぜ?」

それから三人は画用紙に自分が思い描くものを次々と描いていった。ザフィーラもだ。因みに、ザフィーラが描いたものは犬耳でふわふわの尻尾がついた衣服。はやてと悠也は止まらない。それどころか、シャマルが帰ってきてから酷くなった。

それから数時間後、シグナムは何も知らずに帰ってきたのだ。

「くっ……」

私の目の前には敵がいる。いや、主はやてとシャマルにザフィーラ。それに騎士悠也なのだが、今は敵なのだ！

つい数分前にレヴァンティンを貸してほしいと主はやてに言われて、貸してしまったのが運のつきだったのだろう。いや、騎士悠也に攻撃した所から私の運命は決まっていたのだろう……

「ほらほら、早くセットアップしなきゃシグナム」

「騎士は主の言う事を聞くんじゃないのか？」

「はよ見たいな〜」

なら、その手に持っているカメラを置いてください！と強いことは言えない。

なら、私は騎士だ。騎士ならば、騎士ならば主の願いには答えることが出来なくて何が騎士か！

「レヴァンティンー！」

リビングが一瞬、光に包まれた。そして、光が収まるとそこには純白のウエディングドレスを着たシグナムがいた。

「おお………」

悠也は思わず感嘆の息を漏らし

「はわ〜」

はやては目をキラキラさせて

「フフフ」

シャマルはシャッターを連打し

「……フッ」

ザフィーラ（狼）は哀れな視線を送る

「じ、これは………」

シグナムは目の前から送られてくる視線と音を気にせず堂々としているが、やはり恥ずかしいものはあるのか顔をつつすらと赤らめていた。

知識はあるのだ。いくら転生して記憶が薄れていようが、この姿は男と女が世間に生涯を一緒に、と誓う恰好だと。

だが、

「じゃ、次行ってみよう！」

「次なんやっただけ？」

「私も着たいな〜」

「はあ〜」

シグナムは固まった。表情が、体の筋肉が。流石に心臓は止まらなうが、思考は止まった。

「（まだあるのか!?!）」

「レヴァンティン、次いつて」

「Ja!」

「なっ!?!」

悠也がレヴァンティンにそういうと、シグナムが何も言わずに新たなバリアジャケットが展開された。それは、悠也が描いたバニーコスチュームだった。

身体の線がモロに出る衣装は、メロンとはやてに称された母性がプルンとなりすぐさまシグナムは胸を隠した。

「フッフ、甘いわねシグナム。もう撮ったわよ」

「消せっ!今すぐ消せっ!?!」

写真を撮っているシャマルと叫んでるシグナムを、悠也は携帯のカメラで撮る。

なかなか面白い絵が撮れた。そして、

「レヴァンティン!」





### 第13話（後書き）

ギャグ、ですかね？

ヴィータはアイゼンを担いでゲートボールに行ってます。哀れアイゼンw

戦闘……どうしようかな？今は平和な時間を過ごしてもらいたいのです。

とは言え、そろそろ蒐集の事件を書いていこうかなど。

では、一週間後に

## 第14話(前書き)

お待たせしました。

14話です

## 第14話

カーテンが受け損ねた太陽の光が、まだ夢の中にいる少女に降り注いだ。

煩わしそうに体を捻るが、直ぐに障害物に当たってしまい体制を戻した。当たり前のように再び直撃する光。

「くっ……ふう」

八神はやては隣に温もりを感じた。それは、人の温もりで決して自分の横で涎を垂らして寝ている少女がプログラムではないと確信できるものだ。

口元の涎をティッシュで拭いあげ、肩まで毛布をかける。胸に抱いている「のろいうさぎ」が可愛らしい。

寝ているヴィータの頭を一撫でしたはやて。少し名残惜しそうに車いすに座る。

時刻は、八時を少し過ぎたくらい。リビングに降りると、開け放たれた窓から心地よい朝の少し冷たい風が肌を刺激する。

テラスにはザフィーラが悠也から貰った煙草を吹かし、その先にはシグナムが剣を振っていた。

ザフィーラの獣耳がピクツと動いて、私に気づいて煙草を灰皿で揉

み消した。シグナムも、私に気づいてレヴァンティンを待機状態に戻した。

「おはようございます。主はやて」

「おはようございます。良い夢は見れましたか？」

「おはようシグナム。ザフィーラ、夢は見れへんかったけどヴィータの寝顔やったら見れたよ」

そう言うと、二人は呆れたようにため息を吐いた。二人が言うには、ヴィータは守護騎士としての役目は覚えているのかと。

主が起きたのに自分はどうした？とか言ってるのだが、この二人もあまり変わらないのかもしれない。

シグナムは悠也が偶に持つてくる翠屋のモンブランケーキと生チョコの使われているケーキが大好きだ。それも、少しもくれないし黙々と食べてしまう。酷い時なんて悠也の近くに行って誰にも取られない様に食べる。

ザフィーラは悠也の好みが変わったのか、コーヒーと煙草が好きだ。

悠也と仲良くなる前は、私が朝、起きれば狼の状態で部屋に入ってきてリビングまで乗せてくれたのに、今日みたいなのんびりと煙草を吹かしていたりする。  
今度、煙草を隠してみようかと思ったり……。

「あ、今から朝ごはん作るから待っててな」

「はい。ありがとうございます」

「何時もありがとうございます」

そう言いながらも、ザフィーラは私が座る車いすを押ししてくれる。シグナムは、また庭の方に出てレヴァンティンを振うみたいだ。

冷蔵庫を開けると、卵を五個取り出してレタスも四分の一のカットされたものを取り出す。

ザフィーラには、フライパンと油を取り出してもらった。

「ありがとザフィーラ。あっち行っててええで」

「わかりました。何かあれば呼んでください。文字通り、飛んで駆けつけます」

「ふふ、じゃあ怪我とかしたらアカンなあ」

「ええ。ですが、もし怪我を負ったとしてもシャマルが完全に癒してくれます」

「せやな。闇の書でも、参謀兼衛生兵？やもんな」

そう言って、はやてとザフィーラは気づいた。

「「シャマルは？」」

いつも通り、煙草を吹かしながら制服のポケットから鍵を取り出す。今日は夕飯の用意が全く出来ておらず、さらには冷蔵庫の中身が無い。そういうわけで悠也は、はやての家に来ている。要するに、晩御飯をここに食べに来たというわけだ。

そして、玄関のカギを開けドアを開いた。すると、そこには八神家の姉役であるシャマルがシクシクと泣きながら正座していた。

「……………なぜだ」

「ふえ、ふえ〜ん。悠也君助けてえ〜」

「……………なぜだ」

取り敢えず、足を指で弾いておく。



「足が、足があゝゝ!?!?」

足を押さえてピクピクしているシャマルを余所にリビングに入ると、はやてはザフィーラに乗っかってキッチンでご飯を作っていた。シグナムは新聞を読み、ヴィータはアイスを舐めながらゲームに夢中になっているようだ。

「よ、皆」

声を出すと、恐ろしいくらいに皆が一緒に顔をこちらに向けてきた。

「あ、ゆうや。こんばんは」

「騎士悠也。足音を消して近寄ってこないでください。流石に心臓に悪いです」

「悠也、ゲームしようぜ！」

足音を消していた覚えが無いんだが……。それよりもシャマルの悲鳴で普通は誰か来たなって気づくもんじゃないのか？

「くんばんは。はやて」

「今日はどないしたん？まさか、ご飯でも食べに来たんか？」

ブレザーをハンガーにかけて、皺にならない様にかけておく。

「そのまさか。今日は冷蔵庫の中身が空っぽなんだ」

「なら、私にまかshといて。もう一人分作るくらいおちやのこさいさいやー！」

無い胸を張って、はやてはザフィーラと一緒に再びキッチンへ。  
と、そこへシャツの袖を引っ張られた。下に視線を向けると、ヴィ  
ータが頬を膨らませている。

「さっきからゲームしようぜ！って言ってるのに無視しやがって

「悪い悪い。じゃ、なにする？」

テレビの前に移動して、コントローラを引っ張り出す。  
ディスクは大乱闘スマッシュ。あるゲーム会社の出している主人  
公格のキャラが使えるという、まさに大乱闘に相応しいゲームだ。  
因みに、このゲームじゃはやてに負けたことは無い。

「んじゃ、私は赤い豆な。しかも石付きで」

「それは反則だろ！？」

「そうしないと勝てないんだよ！」

既に何十回とした勝負だが、一対一では負けたことが無い。  
一対二でもだ。流石に一対三では負けてしまう方が多いが。  
さつきヴィータが選んだキャラは、石と呼ばれる特殊アイテムで必  
殺技を溜めも回数制限も全てなくしてしまう、まさに反則チートな  
代物だ。

「なら、俺は世界の金ぴかな」

「それも反則！」

どっちが先にやった？

「スタート！」

「ああ！？」

十分後。障害物も何もないエリアを選択したため、勝負が始まった途端に無数の剣が悠也の背後から現れてヴィータを襲う。対するヴィータも、その場から動かずに剣や弾丸や槍やら爆発物を飛ばして対抗していた。が、この必殺技の連続は簡単に見えて簡単じゃない。ヴィータは、せいぜい数回コマンドを入れるだけで後は技を繰り返す方向にカーソルを向けていればいいが、悠也は所謂チートを使っている。それも、コントローラーで打てる性質の悪いものだ。かなり指が死ねる。それはもう、一回の勝負で指が攣るくらい。第三者から見れば、この勝負は悠也が不利だ。しかし、この勝負は悠也の勝利だった。

「ところで、シャマルはなんであんなってんの？」

「あゝ、あれは昼まで寝てたからシグナムとザフィーラに怒られて正座させられてる」

負けたからか、少し顔をしかめながら答えてくれる。それにしても、昼まで寝てたから正座とは。悠也だったらどれだけ正座しなければ

いけないのだろうか。  
ヴィータにもう一回やろうとセガマレるのを、はやてがかけた一声で何とか切り抜け席に座る。  
夕飯が出来たそうだ。ザフィーラも人間の状態に戻って席に座っている。なかなかカジユアルな格好だ。だが、椅子は一つ空いている。シヤマルの席だ。

「しゃーない。俺が行くよ。皆は食べてもいいよ」

後ろから色々と聞こえるが、流石に一人だけを除いて食べることで出来ない。

「なあ、アカレラ」

「なんでしょっ?」

「何時間くらい正座してたと思う?」

「およそ四時間程度かと」

修行した坊さんが出来る離れ業じゃないかそれ？

目の前には、家に来たときと変わらない体制でシクシク泣いている  
シヤマルが正座していた

。取り合えず、足を指で弾いてみる。

面白いくらいに悲鳴にならない声を上げて悶絶するシヤマル。  
なかなか面白いではないか。

「ほら、ご飯できたって」

「立てません」

「もう一発いっとく？」

「……………立てませ〜ん！」

もう一発、指で弾いてみた。本当に面白いではないか。普段は少しドジな姉の様なシャマルが、今は足を指で触っただけで意味不明な声を上げる。  
なんと面白いことだ。

「はあ、動かないでくれよ?」

「は、はい」

「鬼畜ですね。ご主人様」

「うるさいぞ」

後に、シャマルは悪魔がいたと言う。



楽しい食事が終わり、食器を片づけ時計を見ると零時に近かった。はやてとヴィータは、既に風呂に入ってベットの中だ。それも一時間か二時間前の話で、既に夢の中だろう。

シヤマルも既にベットの中。あれは守護騎士でも中々に堪えたらしい。

シグナムも剣を軽く振って、今は湯船につかっているだろう。ああ見えて、お風呂が好きらしい。因みに、はやてに聞いた。

「はい、これ新箱」

「ありがとうございます」

今、リビングにいるのは悠也とザフィーラだ。そのザフィーラは、悠也から煙草を受け取り

嬉しそうに尻尾を振っていた。もう、犬だな。

二人そろって煙草に火を点ける。制服に匂いが付くことなど気にし

ない。

後で香水でも振り掛ければいいことだ。

そうして、口から肺に煙が入り、肺から口へと煙が出てゆく。吐き出される煙は紫煙。

心が落ち着いてゆく。

「幸せだなあ」

二度目の不思議な人生。一人ぼっちだと思っていた不思議な人生だが、相棒のアカレラがいて猫で家族なシオンがいる。それに、妹のような八神はやたとヴィータもいる。

照れ屋で少々バトルジャンキーなシグナムもいる。ドジな姉の様なシヤマルもいる。

喫煙仲間で、防御面でも師匠の様なザフィーラがいる。

もう一度、呟く。

「幸せだなあ」

だけど、こんな小さな幸せを打ち砕く様に、運命は回り始める。

「はやてッ！」

回る廻る。既に決まっているかのように進む運命は、悲しみに向かって進み始める。

## 第14話（後書き）

すいません。1週間に一回の更新が遅れてしまいました。母が倒れて、自分は風邪で倒れてしまい、更にはテスト週間という鬼畜な事があったために時間がかかってしまいました。

- - - - -

さて、ザフィーラの改造ですが煙草好きで珈琲が好きになってしまいました。シグナムについては問題はないかと思えます。シャマルはドジな姉という設定でw

はやてとヴィータは妹みたいなもので。

そして始まった闇の書の浸食。次回からは項蒐集です。バトルです。シリアスです。

バトルって難しい

第15話(前書き)

グダ……orz

## 第15話

はやてが入院した。

この事実は、決して覆ることもなければ避けられる事ではなかった。それに、この結果の原因は悠也、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。五人にとっても身近なものだった。

### 闇の書

正式な名前か、それとも誰かがつけた名前なのかすらわからない一冊の本。

それに、はやての体は蝕まれている。それは、死に至るまでに呪い。悠也は八神家に来た時に知ったものではなく、一年半前に偶然に見つけたのだ。

が、解析しようにも知識がある筈がない。古代ベルカ式のデバイスであるアカレラでさえ知らない。そもそも、地球という限られた、それも魔法という文化が殆どない次元でこの知識を得ると、ピンポ

イントに指定されても無茶という話だ。

確かに、悠也とアカレラは多かれ少なかれ魔法の知識を持っていた。地球にも、遙か昔には魔術が存在した。世界を一瞬で自分の世界に取り込む魔術が存在し。小惑星を地球に落とす魔術が存在した。

魔女が存在した。吸血鬼が存在した。狼男が存在した。伝説の聖剣が存在した。

伝説の本が存在した。燃え盛る杖も存在した。天使と悪魔も存在した。世界の意思が王国を一晩のうちに滅ぼした話も存在する。英雄と呼ばれた王や半神半人も存在する。

悠也の様に、一瞬で空間を移動する人間も存在したのだ。例を挙げれば数えきれないそれは、全て本に記されていた。

遙か昔の事で、手に取った瞬間に塵と化した本も少なくとも無いが、それが記されている本が実在する。

かつて、魔女狩りが行われた最中に魔女が残した本でさえ存在する。バチカンの最下層にある本がそれだ。

なぜ悠也とアカレラが知っているかと言えば、過去に遡る。

知っている理由は至極簡単。潜り込んで、持ち帰って、解読した。それに記されていた一部には、異国の風貌ではあるが主に仕え奇妙な魔術を使う最強の騎士がいたと記されていた。結局は滅ぼされた国なのだが。

話が逸れた。

悠也とアカレラが持つ知識を総動員しても、明確な解決結果は一つしか出てこなかった。  
闇の書を破壊すれば守護騎士が消えてしまう。そればかりか、はやてがどうなるか解らない。だが、このまま残しておいては呪いに蝕まれて、はやては死んでしまう。

なら、ならどうするか。

S a i d シグナム

ただただ砂漠。見渡す限りの砂漠。そんな世界に、私とヴィータが居た。



「すみません主。我らヴォルケンリッターは命に背きます」

烈火の将・シグナムの動きは早い。主が死に瀕している。その理由を作ったのは誰か。

間違いなく私たちだ。本来なら呪いなど物騒なものは組み込まれて無かったはずの闇の書。

以前のシグナム達なら、間違いなく自身を犠牲にしても主の命を救うために本を消し飛ばす。

それをしないのは、優しい主をしつたから。騎士たちの顔に、笑顔があつたから。

第一、そんな事をしてしまえば悲しみ嘆き、泣いてしまうであろう我らが主はやてが安易に想像できたからだ。それに、騎士悠也が偶に持ってきてくれるケーキも食べれなくなってしまう。

思わず、口元が緩んでしまう。何を考えているのだろうか私は。

「どうしたんだよシグナム？」

「いや、少し考え事をな」

頼むぜ。とぶつくさ呟いているヴィータは、自身のグラーファイゼ

ンを振り下ろした。  
そして動かなくなる、硬い皮膚に守られたカマキリのような生物。  
ヴィータはそれに近づき、闇の書を片手にカマキリの体を貫いた。  
数秒後には、ヴィータの掌の上には無色のリンカーコアがあった。  
そして、そのリンカーコアは闇の書に吸収される。

「蒐集……………しょぼい」

埋まった項は、たったの五行。いや、これでも野生の魔法生物なら充分と言えるのだが時間が無いのだ。こく一刻と迫る主の死。

「行くぞヴィータ。早く収集を終えて帰らなければ、騎士悠也にバ  
レてしまう」

「モンブランケーキが食べたいだけじゃないのかよ？」

ぐっ。確かに、モンブランケーキにはただならぬ魅力がある。私と  
て、好きなものがあるのだ。しかし、それは家族が居てからこそその  
楽しみなのだ。

主はやてが居ない今では、そんなものは要らない。

「なら、アタシが食うからな」

「待て、騎士悠也から出された物を食べないわけにもいかない」

「結局は食いたいんじゃないか」

「食べたいのではない。出されたものは食べなければいけないのだ。主はやてからも言われているだろう？ピーマン」

「うぐ」

分が悪くなったのを解ってか、ヴィータはあっという間に飛んで行ってしまった。

ヴィータも変わった。何が、とは言わない。ただ言えることは、アイツも……

さて、私も追いかけるか。これ以上この無人世界で離されては追いつけない。  
そう思い飛び立とうとした時だった。右側から魔力の反応を感じたのは。

「……………」

そいつは真つ黒なフードを被って、二振りの剣を構えていた。  
いきなり現れた魔力反応に驚くが、それは表面に出さない。それを  
してしまえば、次の瞬間にはどうなるかがわかるから。

最初に抱いた感想は隙が無い。そして、隙がある。それが次に思い  
浮かんだ感想。

矛盾。わかっているとも。だが、目の前にいる奴のはその二つが存  
在していた。

腕をだらんと垂らした構え。一見、隙だらけに見えるが熟練した剣  
士は初動を一切見せずに剣を振う。その領域に達しているからこそ、  
その構え。なるほど、強い。

レヴァンティンを鞘に納めたまま右手で柄を握る。足を開き中腰に  
構える。力は適度に抜き、いつでも動ける状態へ。だが、目は常に  
敵へ。

「どづした。こんのか？」

「クツ、居合の構えの間合いに入る奴がいるなら聞きたいものだ」

奴の声は、何かを通している様な声だ。恐らく、風が吹いてフードが揺れても何故か見えない顔が原因だろう。魔法で顔を見えなくしているから声が誰のものかわからず、さらに自分は正体を明かさない。なかなか魔法の方も使えるか……？

「だが」

奴の声が変わる。

「退くわけにもいくまい」

だらんと構えた双剣を、右の剣を左脇に抱くように構え、左の剣は右肩に乗せた構え。

ほう、私の居合の構えを見て構えたのか。右の剣で私の居合を受け

止め、左の剣で首を薙ぐつもりか？

なめるなよ

私の剣は剛。故に一撃。故に必殺。

さあ、こい。一撃のままに剣をへし折り沈めてやろう。

奴が音を置き去りに踏み込んだ。

振られる双剣は、狂わず私の首を狙う。

「おおおおあああ！！！」

鞘から抜いたレヴァンティンも狂わず奴の胴を薙ぐために振う。

が、それを予期していた右の剣。全力で振った剣と、それを遊撃の  
為だけに振われた剣。

どちらが勝つと言われれば、どちらも勝つ。

全力故の必殺。それを理解できていたからこそその全力の遊撃。

なら、勝敗をわけるのは？

力、技、剣の耐久、経験。今回は、その経験が、力が、技がシグナムにとって圧倒的と言っていていいほどに優位だった。

一瞬の拮抗を見せたレヴァンティンと奴の剣は折れることはなかったものの、剣ごと奴に当たり自分を傷つけた。そして、そのまま吹き飛ばした。

「はあっ、はあっ、はあっ」

まさか、一撃でこれほど体力を消費するとは微塵にも思わなかった。気づけば首からは血が溢れていた。すぐさま治療魔法をかけ、奴が吹き飛んだ方を見る。

確かな骨を折る手ごたえと共に吹き飛ばした筈なのに、奴は吹き飛んだ衝撃で発生した砂塵を魔力で吹き飛ばし最初と同様に双剣を構えていた。

しかし、奴もダメージを負っていた。被っていたフードはそのままだが全身を包んだローブは右脇から腰にかけて切れていた。

『グイータ』

『なんだよ!?!』

戦闘中なのか、声には余裕はなかった。

『いや、すまない。そっちには行けなくなった』

呼吸を整え、状況を把握する。奴は……間違いなく強い。この不安定な足場で、音を置き去りにする超加速。そして双剣を扱う腕。間違いない、本気で戦わなければ殺される相手。

『はあ!?!』

『すまない。切るぞ』



『おいつ！？』

悪いなヴィータ。念話なんぞしている時間はなくなってしまった。奴が動いたのだ。

私も、動ける。動脈に達していた傷は直した。奴も、広大な砂漠に血を吐き出した。

肋骨が肺に刺さっていたのであろう。だが、今は痛がるそぶりも見せない。奴も回復魔法が仕えたのだな。

「我が名は烈火の将・シグナム！そちらの名を知りたい！」

これ程の相手だ。名を名乗り、名を聞いても損は無い。

が、これが間違いだつたと、隣で私と一緒に正座しているヴィータと一緒に恨めしそうに目の前に置かれたモンブランケーキと溶けかかってきたアイスを見て過去の自分に言っただけ。そして悶絶してるシャマル。そして、とても、とってもいい笑顔をしている彼を視界に入れない様にモンブランケーキに集中する。集中するッ！

「俺か？俺は」

フードを取り、見慣れた顔が現れ目を見張った。そして、何故と声が出そうになって彼の顔を見て体が固まった。

S a i d 悠也

久しぶりの鈍痛に顔を歪めながら、そして最ツツ高に！いい笑顔をしながらシグナムを睨み付ける。

「お前たちのお叱り役の神崎悠也」

さあ、お仕置きの……お叱りの時間だ。

「大人しく帰ろうか」

おいおい、どうしたシグナム。なんで、そんなに体を縮こまらせて  
兎の様になってんだ？

思わず、その可愛さに苛めたくなくなるじゃないか。

「ご主人様。騎士シグナム達は決して悪気があってやったわけでは  
ないのでから、少しは加減して上げてください」

「無理」

「しかし」

「はやてが入院してから三日経ってシグナムとかヴィータが塞ぎ込んでないかな、って思ってケーキとかアイスとか大量に買い込んだのに家に着いたら明らかにおかしいシヤマル。」

問いただしても教えないシグナムとヴィータの居場所。しかも、はやてが倒れた日にやってた話し合い。考えれば考える程に決まる答え。バインドして無理やり正座させてシヤマルに吐かせたら。なに、砂漠で蒐集してます？はやてに言わず？俺に言わず？心配してるのに、楽しそうにカマキリみたいな化け物を斬ってイキイキして？水に入れた魚みたいに？

え？俺の心配って何？はやての心配って何？」

目の前でオロオロしてるシグナムは「あの」とか「ですが」とか言ってる。

取り敢えず、ポケットから取り出した煙草に火を点ける。

ああ、やっと吸えた煙草。一日目に続き二日目も病院で入院しているはやての傍にいて、二日目も傍にいて、三日目に着替えを取りに行つてシオンにご飯を食わして、そしてシグナム達の昼食と夕飯を作らなきゃいけないな。なんて考えて家に着いたら居ないわ、蒐集してるわ。はやても心配して帰りたいって言ってるから俺が行つたらいいない？

俺とはやての心配を余所に？

アカレラ。俺と対峙した瞬間に笑顔を浮かべたシグナムに手加減なんているのかな？

「……騎士シグナム」

「……………」

「諦めてください」

「ひうつー!?!?」

S a i d  
ヴェータ

目の前のモグラみたいな化け物をブツ飛ばして、急いで蒐集する。

「シグナム！」

既に念話は通じなくなっていた。けど、最後の念話の後に一回だけ聞こえた声。

『ひうつ』

シグナムからは到底、これっぽっちも想像がつかない怯えた声。その声がアタシを焦らせる。あのシグナムが、怯えた声を出すなんて相手はいない。

例え格上であつても、自分の誇りが折れるまで戦った彼女からは怯えた声は出なかった。

あれ？なんでアタシはそれを知ってた？

けど、今はそんなことはどうでもいい。はやく、速くシグナムの元へ行く。

あの時アタシと一緒に移動していたら、こんな事にはならなかった。後悔は遅い。けど、シグナムだって弱くない。それでも、速く行かないきゃいけない。

見つけた。

シグナムはペタンと座り込んでいる。その体面にいる、体格からして男はアタシに背中を見せている。

「おい！？シグナムに何したんだ！」

グラーフアイゼンで殴り掛かったけど、あの男は背中に目があるのかと思うくらい正確に剣で防いでいた。けど、よく見りゃ罅が入っている。ハッ！そんな状態の剣でアタシのアイゼンを防げると思っ  
な！

「カートリッジローツ！！？」

男が振り向いた。

「よお」

殺気も何もない。無い筈なのに、体が委縮する。

「ヴィータ」

そこには、一度しか見たことない笑顔の悠也がいた。

「お仕……お叱りの時間だ」

た、助けてはやて!!

「ひうつ!?!」



S a i d

あの灼熱地獄で、汗は全て蒸発したものの体は気持ち悪かったのでシャワーを浴びた。

それはシグナムもヴィータも一緒だ。

「さて」

悠也の言葉に肩を震わせる二人。ザフィーラは知っていたものの、実行犯じゃないから煙草を没収した上に病室ではやての許しがでるまで正座。はやてなら十分もすれば許してくれるだろう。だけど、悠也は許さない。許さないったら許さない。

シャルはもういい。十分に遊べたし。今はソファでコーヒーを飲んでるけど、ついさっきまではビクビク悶絶して「足が取れちゃいます!」とか言ってたし。

「どっしょしてくれよう?」

「いや、勝手に蒐集しに出かけたのはアタシ達が悪かったんだろうけどさ、ここまで怒る必要はくないか?」

「グイータの言う通りだ騎士悠也。あのまま続けていけば両方、無傷とはいかなかった」

「だから、自分たちは悪くないと正当化するのか?」

確かに、やりすぎた感じもある。何度も意味不明な場所にジャンプしてストレスがバカにならないほどに高まっていたことも相まって、魔力でブーストしてまで攻撃する必要は無かった。

だが、シグナムの居合の構えを見た瞬間に、このまま突っ立ってても何れは間合いに踏み込まれて殺される。なら、全力で必殺の一撃を遊撃して気絶させて連れ帰ろう。

そう思っていた。そう思っていたけど、結果は吹き飛ばされ肋骨を三本もへし折られ、内二本が吹き飛ばされ着地した瞬間に肺に刺さった。

あ、これは止められないな。そう思っていたところでシグナムが名乗りを上げた。

これが無ければ、間違いなく死闘が始まっていただろうし、怪我では済まなかったかもしれない。

けど、悠也には言いたいことがある。

「なあ」

「……………はい」

「俺が怒ってるのは蒐集に行った事でもないんだ」

そう、怒っている理由は一つ。

「なんで俺に何も言わなかったんだ？言ってくればリンカーコアなんていくらでも差し出す」

どうして何も言わずに飛び出していったんだ。と言う事だ。せめて一言だけでも声をかけてくれれば喜んで蒐集を手伝った。よろこんでリンカーコアを差し出した。それに心配もした。

勿論、シグナムとヴィータの戦闘能力は知っている。知っているも、身近な、家族の様に大切な人達は心配なのだ。

「俺の大切なものは魔法でも何でもないんだ。はやても含めて俺の身近な人が大切なんだ」

シグナムとシャマルが目を見開いた。

「それは、私たちもですか？」

「そりゃな。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。出会ってからの時間は短いかもしれない。けど、俺にしちゃ大切なもんな

んだよ」

出会いは最悪だった。けど、それから一緒に過ごした時間は最高のものだった。

もう、悠也にとっては忘れることが出来ない思い出。大切な家族な様な物。

「ああ、そうか。俺は

」

悠也は座っていた椅子から立ち上がり、リュックサックを持ってリビングから出て行った。

S a i d 家に残された騎士達

悠也が呟くようにして出て行ったのを何も言えずに見送ってしまった。

だが、それを止められることは出来なかった。悠也の顔が、何かを悟った様な。そんな表情だったからだ。

「ねえ、私達の大切なものってなに？」

「それは……主はやて」

「けど、悠也も大切だ」

前の私たちなら大切なものは？

と言われれば主はやて。そう直ぐに答える事が出来た。

だけど、今は違う。優しい主はやてが好きだ。そんな優しい主を支えてくれて、何時も我らヴォルケンリッターにも優しく接してくれ

る悠也。守るものが増えてしまった。そうシグナムは思う。  
なら、悠也も私たちを守るものとして見てくれているのだろうか？

「ふふっ」

「む、どうした？」

「シグナム、顔に出てるわよ」

シヤマルはおかしそうに笑いながら、コートを羽織った。それから、シグナムとヴィータの分の上着も持ってきた。

「早く行かないと、悠也君が許してくれないかもね」

「それは駄目だな。早く行かないと」

シグナムもコートを羽織、ヴィータにも子供用のコートを渡そうと  
して固まった。  
視線の先には、アイスを食べ終え今にもモンブランケーキにフォー  
クを刺そうとしているヴィータの姿があったからだ。

「ヴィータ！」

「早いもん勝ち！」



## 第15話（後書き）

どう……でしたか？

グダと言わないでください。わかっています。

さて、はやてが入院したことによって蒐集が加速しますが、フラグです。

この入院は三つくらいあるフラグですかね？

一つ目のフラグは勿論、蒐集の加速。蒐集して、闇の書を完成させれば足を治せる。

二つ目は悠也の蒐集参加。

では、次回を楽しみにしててください。

## 第16話(前書き)

感想ありがとうございます。

至らないところが私にはありますので、誤字脱字や理解できないなどといったことは言うてください。

ネタバレにさせない様に説明いたします。

## 第16話

太陽が真上にある時間に、病院の施設内に設けられている広場で、悠也は煙草を吹かしながらベンチに座っていた。視線の先には、夏には数人の子供が遊ぶであろう小規模な噴水があった。

少し視線を外すと幾つもの小さな丸テーブルとイスが置いていて、そこには白衣を着た医者であるう人がコーヒーを飲んだり煙草を吸っていた。

物好きな人たちだ。この寒空の下でそんなことをしているのだから。

「あら、神崎君。はやてちゃんはどうしたの？」

右手に湯気の立つカップを持ち、左手には幾つかの資料を持っている石田先生が悠也の隣に座った。

この石田先生との出会いは、はやてが雨の日に病院に行かなければならなかったときに、悠也が「濡れるから」と言っただけに行つたとき会つたのだ。それから少し喋ったり、はやての誕生日会に来てもらったりなどだ。

「病院の中は暖かいから、寝ちゃったみたいです」

ワザとらしく肩を竦めて煙草を吸う。

「そう。それで」

「あっ」

ギリギリ、と効果音が付いたような錯覚と共に口元に合った煙草が消えていた。

石田先生の手元を見ると、携帯灰皿に押し込められている煙草があった。

医者は、というよりも未成年者が煙草を吸っているとすれば、取り上げるのが大人と言うものだ。隣に座る石田先生を横目に、悠也は上着の内ポケットから新しい煙草を取り出そうとして止めた。

もし出そうものなら箱ごと取り上げられるからだ。実際に、はやての家に置いてあった新箱をこっそりと持ち去られたのだ。それも十二箱。

「……用事を思い出したので帰ります」

「あら、このままポケットにある箱を出してたら取り出したの  
にね」

「はやくとザフィーラに夜にまた来ると言っておいてください」

顔が引き攣らない様に心がけながら、悠也は病院を出た。

そして、あまり人が通らない路地に移動して悠也は消えた。

まるでバケツを引っくり返したかのように降り続ける雨。そんな世  
界に一つの人影があった。

そして、その隣に急にもう一つの人影が現れた。

「酷い雨だな」

「まったくだ。バリアジャケットが無ければ下着まで濡れてしまう」

悠也とシグナムは、そのまま上に飛ぶ。雨は雲から発生しているのだから、その上は晴天だ。だが、そこに辿り着くには雷や荒れ狂う風という障害が発生するが、そんなものは関係ないと言わんばかりに球体のシールドを使って高速で分厚い雲を通り抜けた。

そこには、見渡す限りの青と淀んだ雲。そして巨大な龍が飛んでいた。

日本では太古の昔に存在したという伝説の生き物。西洋には太古の昔に存在したお伽噺の存在。そんな存在が、悠也とシグナムの100メートル先に存在した。

翼を広げて、そこにいるだけ。だというのに、その存在感は計り知れない。

「アカレラ、剣を」

「畏まりました」

アカレラが一本の剣に変わり、右手に。シグナムは既にレヴァンテインを持っている。中段に構えるわけでもなく、下段に構えることもない。だらんと力を抜いて構える。それが悠也の構え。相手に初動を知られる事無く動く構え。

「行くぞ！」

「言われるでもない！」

魔力をブーストさせて悠也本来のスピードを遥かに超えるスピードで斬りかかる。本来なら音もなく斬れるが、鈍い音とともに手に伝わってきた反動に顔をしかめた。硬い。ものすごく硬い。

「ハア!!!!!!!!!!」

シグナムもシグナムで龍を斬る。スッパリと斬れた傷口からは血が出ることもなく黒く焦げていた。炎の魔力変換だ。炎でレヴァンテインを高温にして焼き斬ったのだ。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA」

ビリビリと空気が振動する。龍は吠えただけなのに、二人とも吹き飛ばされた。圧倒的な敵。種の違い。存在からして違う存在に、悠也は圧倒された。だが、

「黒騎士、推して参る！」

見たこともない存在に恐怖している、自分に喝をいれる。こんな障害は要らない。自分は一人の女の子を救う為だけに、動く。動け。動かなければ、はやては死んでしまう。



「オオオ!!」

黒い魔力を全身から迸る。それが、推進剤となって音を置き去りにした。

だが、相手は龍。シグナムですら目で追う事の出来ない悠也を、その巨大な尻尾で遊撃する。

これが悠也一人なら遊撃出来ただろう。だが、ここにいるのは二人だ。

烈火の将・シグナム

「飛龍　　一閃!!」

炎の斬撃　　飛龍一閃　　を飛ばしながらシグナムも龍に飛び出していた。

何も、この龍を殺さなくてもいいのだ。蒐集さえすればいいのだから。

と言っても、この存在相手に簡単に出来るとは思ってもいない。現に、悠也はその存在に圧倒されてしまって勝負を急いではまっている。

あの魔力の解放は後先を考えないものだ。

だから、悠也に気を取られている内に蒐集してしまおう。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA」

飛龍一閃で、僅かに尻尾の軌道を逸らされた龍の腹に穴が開いた。あの超加速で、硬くない場所にあれだけの魔力が直撃したのだ。貫通しない方がおかしい。

そのまま悠也は龍からだいぶ離れた場所で停止した。

シグナムは、龍が悠也の方向に向けた瞬間に蒐集を開始。普通の魔導師相手なら数十秒で済むが、龍は数分かかってしまった。

その間、龍は暴れに暴れたがバインドで口を封じられ足を封じられ、尻尾までバインドでグルグル巻きにされて身動きが一切取れなかった。

「蒐集完了……なかなかだな」

蒐集を終えたシグナムは、落下してゆく龍をしり目に浮いているだけの悠也の傍に寄った。

肩で息をして、アカレラの切っ先は完全に下に向いていた。

これ以上は戦えませんかって感じだ。

「つ、疲れたあ」

「そうだな。お風呂に入って汗を流したいな」

「はやても待ってるし、帰ろ」

そのまま悠也はシグナムの肩を抱き、引き寄せた。  
そしてジャンプした。

結局、悠也が自分の家に着いたのは夜の九時だった。予想以上に探索、撃破、蒐集に時間をかけてしまったようだ。だが、それでも今回の蒐集は大きかった。10ページも埋まったのだ。満足だ。

「けど、力不足……かな」

「いえ、ご主人様は恐れながらもアレを撃破しました」

確かに、龍の腹を貫いた。けど、あれはシグナムの援護があったからこそ出来たものだ。

悠也は恐怖した。自分よりもデカい存在に。心が震えた。存在からして違う存在に。

生きた年月が違うのか、それとも種としての圧倒的存在からか。結果は勝った。それでも、負けた。

戦場では一瞬の隙が致命傷となる。それを理解していても、恐怖した。

「んじゃ、そろそろ行くか……?」

自分の寝室に入って、ラフな格好に着替えた悠也はモゾモゾと動く毛布の気づいた。普通、一人と猫一匹の家で勝手に動く毛布など見たことが無いし見たくもない。シオンは腕の中にいるのだ。

「……………」

「にゃ〜」

「GO!シオン」

「にゃ!?!」

君に決めた!と言わんばかりにシオンを空中に放り投げ、ベッドを指さす悠也。

と言うよりも、既にシオンの着地地点はベッドだ。流石に硬い床に落とすほど悠也は鬼畜ではない。

「うわ!?!」

「シャッター!」

余りにも覚えがある声が聞こえ、シオンが威嚇した。威嚇というよりもビククリしたから出た声だろう。数秒もかからないうちに腕の中に戻ってきたシオンの頭を撫でながら、ベッドから落ちた少女に声をかけた。

「なにやってんだヴィータ」

そう、毛布の中でモゾモゾしていた犯人はヴィータだった。もう寝間着姿のヴィータは、毛布の中でモゾモゾしていたから髪がぐちゃぐちゃになっていた。

「これからはやての所に行くんだろ!?!」

「行くよ」

「アタシも行く！」

「ん」

「わぷっ」

悠也はハンガーにかかっていた黒のパーカーをヴィータに着せ、ぐちゃぐちゃになっていいる髪を直してやり抱きかかえた。はやてと同じ背格好のヴィータを抱くことなんて簡単だ。

パーカーが大きすぎて、それ自体が服みたいになっているが冷えて風邪を引くよりは遥かにマシ。ジッパーを上げてフードを被せると全く前が見えない。

「行くぞ」

」  
「おじ

悠也はヴィータを抱きかかえてジャンプした。

S a i d

夜、はやては石田先生が指定した病室で夜空に浮かぶ月を見ている。真つ暗な夜空に浮かぶ孤独な月。よく、はやては月を自分に見立てていた。孤独な自分を。



けど、よく目を凝らして見れば周りには月が放つ光に負けじと光を放っている無数の星が存在していた。暗い夜を照らす月と星々。

「なんか、なあ〜」

疲れていたのだろうか。悠也に見守られながら昼過ぎには寝てしまい、起きてみれば空は茜色に染まっていた。寝る子は育つと言っけれども、よく考えてみれば寝すぎ。いや、よく考えなくても寝すぎである。普段からエネルギーを使わないはやてが眠くなるためになにをすればいいのか。

只でさえ病院と言っ限られた施設の中で、足が不自由なはやてが出来るものなんて読書か車いすで散歩か寝るくらい。結論、できない。

図書館で借りていた本も全部読んでしまった。友達に借りた本も読み終えてしまった。

散歩なんて、こんな時間から行くものではない。つまるところ、九歳児のはやては暇なのだ。

「失礼します主」

極力存在を消していたザフィーラは、ベッドの上で唸る主を抱きかかえた。  
突然の事で、きょとんとするはやてだがザフィーラはそのまま病室を出て階段を上っていく。勿論、主に風邪を引かせないために厚手の上着を着せて。

「どないしたんザフィーラ？」

「少し風に当たりますよ。そうすれば、今の気持ちも収まるかと思えますので」

そう言いながらザフィーラは、はやてを横抱きにして屋上に出た。もう少して十二月に入ろうかと言うこの時期の夜は寒い。だが、空気が澄んでいて星がよく見える。それに、はやての気分も少しは落ち着いた。

「主はやて。寒くはありませんか？」

「ん、ちょっと」

ザフィーラは、自分の上着を器用に脱いでコンクリートの上に敷いた。そこにはやてを座らせ人間状態から狼状態に変身した。そして、

「わ、あったか〜」

「ありがとうございます主」

はやてを包み込むように丸まり、尻尾を足に乗せた。狼の毛皮の完成だ。

「……………む」

「どないしたん？」

「なんでもありません」

ザフィーラは暖かかった。大型犬サイズのザフィーラは、小さい主をすっぽりと覆いこんでしまうほどだ。他の子供と違い、足に障害を持つはやては体の発達が少し遅れている。だが、それでもザフィーラは大きかった。もふもふである。

「あ、ザフィーラから煙草の匂いする」

「……本当ですか？」

「冗談や」

クスクスと笑うはやて。確かにザフィーラは煙草を吸っているが、匂いはしない。

ちやんとお風呂に入るし、日向ぼっこだって主とする。つまり、はやてに言わせれば「おひさんの匂いや」である。そもそも、主を重んじるザフィーラがそんな失態を犯すわけがないのだ。

「ふむ、主はやて」

「ん？」

「後ろに悠也がいます」

「えっ？」

バツ、と振り返るはやて。だが、その視線の先には誰もいなかった。やり返した。

「誰に似たんや……。悠也しかおらんやん」

後ろを向いたまま、呟くそこに居るはずのない声が上がった。

「誰がくだらないことをする奴だっけ？」

「え？」

正面を見ると、そこにはヴィータを抱きかかえた悠也が立っていた。啞然としているはやてに、悠也はデコピンを一発。

「あう」

「はやて！」

デコピンされた額を押さえていると、ヴィータがはやてに抱き着いた。

「尻尾ツ!？」

二人に挟まれた尻尾を何とか抜けさせ、そのまま二人に被せた。悲鳴のような声を上げたザフィーラだが、そのまま動じないのは流石としか言えない。

「後でブラッシングしてやるよ」

「感謝します」

ザフィーラは体の内側で抱き合ってニコニコと笑っている主とヴィータを見て笑う。それにつられて悠也も笑う。

「はやてっ、今日は一緒に寝よう!」

「ええよ。ザフィーラそろそろ戻る」

「わかりました。このまま乗っていきますか？」

「うん！」

「アタシも！」

伏せの状態から、はやてとヴィータを乗せる。普通なら子供が二人も乗ったら歩けないだろうが、普通じゃない。盾の守護獣・ザフィーラだ。ヒョイと四本足で立ち上がり、自分の上着を啜える。

「悠也も、一緒に寝よ？」

「病室のベッドじゃ無理だよ」

「ええやん」



「じゃあ、アタシが悠世の上で寝るからさ」

「アカンでヴィータ。それは私がすんの！」

「はちてはいつつもやってるじゃんか」

「それでも！」

「じゃあ一緒に悠世の上で寝てみろ」

「それやー！よっしや。早く行こザファイアー」

「わかりました」

人が乗っている重みを感じさせない足さばきで屋上から移動する三人に、悠也は煙草を取り出して火を点けた。そして煙を吐き出す。

「俺の意思は？」

「はやて嬢も寂しかったのです。そこは諦めましょうご主人様」

そのまま屋上でフィルターの一步手前まで吸った悠也は屋上から出て行った。

その夜は、悠也の意思など関係なかった。病室に着いた途端にザフィーラに捕まり、ベッドに寝かされて、その上にはやてとヴィータが乗っかり寝息をたてはじめたからだ。

ザフィーラはザフィーラで、部屋の隅で丸くなって寝ていた。

## 第16話（後書き）

皆さん。ヴィータがブカブカのパーカーを着ている所をm……想像してください。

ぶかぶかで、袖からは指が出るはずもなく。

わかります、変態ですねw

さて、ここで一つ確認したいことがあります。

それは、悠也の設定は普通の人だということです。厳密には、少し違いますが普通の男です。

そんな悠也が自分よりも圧倒的な存在である龍と相對したらどうなるか？

恐怖し、心が折れ欠けます。そして、それを押し切って攻撃すれば簡単にカウンターで葬られてしまいます。そんな感じで書きました。

では……

## 第17話(前書き)

誤字脱語があれば言うてください。

感想お待ちしております

## 第17話

昼前の平日に車いすに乗ったはやて。そして、車いすを押すシグナム。そしてシャマル。

なぜ、病院にいるはずのはやてが此処にいるのか。それには理由がある。

朝、石田先生に言われたのだ。

「良くもなっていないし悪くもなっていないのよね。どう、退院する？」

勿論はやては即答した。「うん！」と。家に連絡を入れると、護衛にシグナムと医療に詳しいシャマルが迎えに来てくれたのだ。そして今に至る。

「まったく。騎士悠也は昼になっても起きてこないとは」

「あれ？シグナムだって私が起こさなかったら寝てたじゃない」

「む。それはだな、騎士悠也が面白い本を貸してくれたのが悪いのだ」

「ふふふ。そうね」

「……なんだこの敗北感は」

二人のやり取りをクスクスと笑いながら聞いているはやては、自分の家の前で立っている小さな少女を見つけた。赤毛の髪を後ろに結ってポニーテイルにしているヴィータだ。そんなヴィータは、俯いて足をブラブラとさせていたがシグナムとシヤマル。そして、はやての声を聴くと勢いよく顔を上げ、駆けだした。

「はやて!」

「ヴィータ!」

やはり、外見的に年齢の近い二人はよく気が合うのか仲がいい。守護騎士の中でも、だ。

だからと言ってシグナム、シャマル、ザフィーラとも仲がいい。シグナムとは一緒にお風呂に入った時のターゲットで、ヴィータとは一緒にゲームをしたりして遊んでいるし、シャマルとは一緒に料理をするし、ザフィーラとは一緒に日向ぼっこをしたりしている。

まあ、日向ぼっこにはヴィータもシャマルも参加していたりするのだが。

まあ、何はともあれ家族が揃ったのだ。  
はやて。シグナム。ヴィータ。シャマル。ザフィーラ。只一人、悠也を除いて。

「あれ、洗濯物とかないん？」

家に入ったはやては、まず脱衣所の前に来ていた。そこに、本来なら家事が出来る唯一のはやてが居ない状況で溜まっている筈の洗濯物が無いのだ。一つも。

「私がやりました」

車いすを押してくれていたシャマルが胸を張って自慢げに言う。表情は、まさに私がやりました！と言わんばかりだ。はやてが入院する前は、本当に簡単なことしかできなかったのだ。皿洗いや、家の掃除。洗濯物を干す事など。

「それは騎士悠也が教えてくれたからだろう」

「言わないでよシグナム！」

そう。事實は悠也が丁寧に一から教えていたのだ。悠也曰く、料理以外は水を吸収するスポンジみたいに覚えがいらしい。だからと言つて、料理が全くできないわけではない。最近は簡単なものが出るようになったのだ。朝ごはんの簡単なものが……

「ほな、そろそろお昼ご飯でも作るかな」



「あ、私も手伝います」

「お願いな」

「はい」

久しぶりに揃った家族で食べるお昼ご飯は美味しかった。

時間は過ぎ、夜になると悠也が買い物袋を持ってはやての家にお邪魔していた。

と言うのも、はやてが入院している間のご飯は悠也が作っていたからだ。そのため、はやての家の冷蔵庫の中には昨日の残り物が少し残っていただけなのである。

だから、悠也の手の中にはパンパンの買い物袋がある。

「騎士悠也、どうですか？」

「いや、いきなりレヴァンティン突き付けられてもな？」

荷物をザフィーラとシャマルに渡して、突き付けられたレヴァンティンをどける。

ふとヴィータを見ると、大きい鍋を被って部屋を走り回っていた。

「なにやってんだ」

「あ、悠也！見てくれよ、カッコよくなえか！？」

「じふー」

「あっ」

まるで、小さな男の子が五色の全身タイツの被るヘルメットを手に入れたかの様な喜びようだ。だが、すぐに追いかけてきたはやてに取り上げられて、しょんぼりしている。

「はやてのいけず」

「あ、言ったな。ヴィータのプリンは無しや」

「ええ!？」

「なら、はやてはダイエットでプリン無しな」

そう言いながらヴィータを後ろから抱き上げる。はやてと同じくら

いか、それ以上に軽い。

「ええ！？つて、悠也！」

「ほら、最近お腹のお肉がとか言ってたみたいっ！？」

言い終える前に車いすごと突っ込んできた。悠也が避けられればいいのだが、後ろは壁だ。

それに、両手はヴィータを抱っこしてるからふさがっている。結果、悠也の脛に車いすのフ

レームが直撃した。思わず蹲る悠也だが、首の後ろに手を回された。はやてだ。

「悠也」

「ん？」

「ただいま」

「おかえり」

そっと、首に回していた手を離してシグナム、シャマル、ザフィーラの方に向いた。

「ただいま」

「おかえりなさい主はやて」

「あかえり、はやてちゃん」

「おかえり、主」

「お帰りはやて！」

外は寒いというのに、家の中は春が訪れたかのように暖かい。はやてが笑顔でいる。それだけで騎士たちは笑顔に慣れる。皆が笑顔でいる。それだけで悠也は笑顔になれる。騎士達の心に、また深く誓いが刻まれる。

この笑顔を守るためなら、我らヴォルケンリッターは修羅にでもなりましょうと。

そんな主と騎士を見守る悠也にも、また深く心に刻まれる。

この暖かい家族をいつまでも守ろう。そして、はやてを必ず救うと。

## 第17話（後書き）

今回は短かったですね。

さて、はやてが一時的に退院しました。フラグの回収をしたいと思っています。

それに、そろそろ本格的な戦闘になりそうです。や、戦闘の描写って難しいものですね。

第18話(前書き)

短いですが、どうぞ



## 第18話

ヴィータとザフィーラが見下ろすのは、広がる街の光だ。  
つまり、ヴィータとザフィーラは飛んでいる。だからと言って、地上にいる人間には見れる様な低さではない。

「どうだヴィータ、見つかりそうか？」

「いるような……いないような」

余り容量を得ない答えに、ザフィーラは騎士服に着いているポケットから煙草を取り出して火を点けた。本来なら、ここで二人は別れて探すのだが悠也が禁止していた。

常に二人一組で動く。そう言われているのだ。これは色々と悠也が考えた結果だ。

確かに、別れて探せばそれだけ蒐集できる対象が多く見つかる。だが、それは同時に危険を伴っているのだ。それを危惧した悠也が提案したのが二人一組。

連携を取って敵を倒して蒐集。これは思ったよりも簡単なことだ。

守護騎士と言えば、もう何年も共に過ごしてきた仲間である。連携の訓練をするまでもなく息が合った戦い出来る。

「大物見つけ！」

大きな魔力。これなら、闇の書の項も埋まる。

「封鎖領域、展開」

ザフィーラを中心に、結界が張られた。かなりの広範囲だ。街を殆ど覆った封鎖結界は性質上、外から入るの者に対して効果はあるものの高位力のダメージで破られては流石に侵入を許してしまう。ただ、結界の内側にいる者に対しては絶対的な効果を示す。高位力のダメージを与える為には、どうしても隙が出来る。その出来た隙でヴィータとザフィーラが襲い掛ければ、相手は戦うしかない。それに、この結界は念話の類も遮断する。魔導師を狩るのには相性が良すぎる代物だ。

二対一。殆ど同じ魔力の量。ならば、勝敗を分けるのは質だ。ここで仲間を呼ばせたらどうなるか解らないが、そのための結界だ。この結界に気づいて、外にいるかもしれない仲間は今頃慌てているだろう。

「では、いっしょ」

「あいよー!」

街に見たこともない結界が張られた。まさか、この世界で再び結界が張られるなんて夢にも思わなかったなのはとレイジングハートは啞然としていた。

「レイジングハート!」

「Set up」

魔法の練習を欠かさずやっていたおかげか、苦も無くバリアジャケットを展開した。

相棒であるレイジングハートとの息もピッタリである。

「嘘、念話が通じないよ!?!」

「Perhaps it is caused by this prevention against evil!」

初歩の初歩である念話が通じない。この結果がそんな性質なんて知るわけもない。

そして感じる二つの大きな魔力。明らかに「お話」が出来る様な感じじゃなかった。

その二つの魔力は、どんどんと近づいてくる。

「レイジングハート、アースラの皆にSOS信号って出来る?」

「It takes the time a little, but does not have any problem」

「よし、じゃあ大丈夫だね」

友達のユ一ノ君。そして時空管理局の執務官であるクロノ君に教えてもらったものだ。

緊急時には構わずSOS信号を出せと。流石に、万年人手不足の時空管理局だからと言っても九歳

の女の子を戦場に出すわけにはいかないのだ。それに、両親が許さない。

まあ、戦場に出ていない代わりに災害現場などには出ているのだが……。

「……くる」

首筋にゾクリ、と何かを感じたのはは飛び上がった。

それなりの高さまで上がると、はるか前方に赤い魔力と青い魔力が見えた。

まだ、相手は遠い。落ち着いて対処しよう。そう思ってレイジングハートを構えた瞬間。

「Protection」

凄まじい衝撃と、ピンク色のシールドが張られた。

「チツ、防ぎやがったか」

すでに、強化した視力なら相手の顔がわかる近さまで接近したヴィータは舌打ちした。  
鉄球をアイゼンで先に撃ち出していたが、防がれたのだ。はやてと同じくらいの背格好の少女が強いのか。はたまた、少女の持っているデバイスが優秀なのか。

「ザフィーラ。ここはアタシがやる」

「わかった。だが、あまり無茶はするなよ？」

「ハッ、わかってるって！」

ザフィーラをその場に残し、ヴィータは目の前の白い魔導師を睨み付ける。

不意打ちはもうお終い。

ヴィータとザフィーラの作戦は、先に鉄球をアイゼンで撃って白い魔導師の後ろに回り込ませて撃墜すること。けど、それは失敗に終わってる。なら、せめて騎士らしく“正面”から行くのではないか。

「君は誰？いきなり襲われる覚えはないんだけど……」

「あゝ、それは悪かったな」

「ふえ？」

いきなり襲い掛かってきた相手。それも奇襲されたのだから、こんなにも素直に答えてくれるとは思ってもしなかったのだろう。現に、なのはもビックリした様な顔になっている。

けど、そんなことはどうでもいいと言わんばかりにヴィータはアイゼンを上段に構えた。

「ま、待って！」

「煩せえ。こつちには時間がねえんだよ。だから」



だから

「潰れるオ!!!」

鈍器を武器にしているものの利点。日本刀は、斬ることに特化した刃物だ。達人クラスの人物が使えば、盾など関係なく斬る。シグナムが使う西洋剣は、叩き斬るものだ。叩き、斬るのだ。そして今、ヴィータは上段にアイゼンを構えている。ハンマーは、潰すことに特化している。大きなハンマーなら、力を入れずに振り下ろしただけでも骨が折れることもあるし、死ぬことだってあり得る。なら、体を強化しているヴィータがアイゼンを振り下ろせばどうなるか。

「レイジングハート!!!」

「Round shield!!」

さっきの衝撃とは桁違いの衝撃を受けて、なのははビルに撃ち落とされた。

## 第18話（後書き）

デバイスの喋りはどうでしょうか？

日本語の方がいいのでしょうか。それとも雰囲気のために英語、ドイツ語とかの方がいいのでしょうか？

と言っても、エキサイト英語なんですけどねw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7826u/>

---

夜天の主と黒い騎士

2011年11月7日11時08分発行